

増刊・地域と協同の研究センターNEWS

2016年6月

地域と協同

第5号

発行：特定非営利活動法人
地域と協同の研究センター



特集

よりよい“暮らし”をつくる地域のつながり！ ～小さなつながりからひらける地域の未来～

《はじめに》	2
《基調講演》 岐阜大学応用生物科学部教授・地域と協同の研究センター理事 荒井聡氏 「小さな協同・新たな協同で拓く地域の未来」 ～第35回日本協同組合学会・岐阜大会に学ぶ～	3
《地域の事例報告》	
【愛知県】研究センター三河地域懇談会世話人 田所 登代子氏 「とよはし“ちょいボラ”の会」代表世話人 水藤 典子氏	11
【岐阜県】石徹白農業用水農業協同組合参事 NPO法人地域再生機構副理事長 平野 彰秀氏	15
【愛知県】JA愛知厚生連 足助病院 企画室長 上田 章弘氏	19
【愛知県】南医療生活協同組合 副理事長（星崎ブロック） 中村 八重子氏	23
【三重県】水土里（みどり）ネット 立梅（たちばい）用水事務局長 高橋 幸照氏	27
NEWS編集委員会座談会	31
《編集後記》	39

特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター

はじめに

「地域と協同」第5号は、今年（2016年）1月23日に開かれた第12回東海交流フォーラム「よりよい“くらし”をつくる地域のつながり！～小さなつながりからひらける地域の未来～」の基調講演と5つの事例報告を紹介しています。

荒井聡先生の《基調講演(P3-10)》「小さな協同・新たな協同で拓く地域の未来」～第35回日本協同組合学会・岐阜大会に学ぶ～は昨年10月、東海3県では25年ぶり、岐阜県では初めて開かれた日本協同組合学会岐阜大会2015・3日間で共有できた内容を紹介いただきました。協同組合がそれぞれ、地域にある宝物を最大限活用して、商品開発や商品を通じて生産者と消費者との交流が深まり、生活基盤のゆらぎと並行して進んでいました。また、これまでの支え合いやつながりを基礎として、新しい協同の取り組みとして買い物支援等を紹介いただきました。二日目の大会シンポジウムでは「未来社会に向けた協同組合の選択」をテーマに研究者の報告があり、その内容を学習の対象として紹介いただきました。

地域社会における協同組合の役割は倫理的消費などがあり、社会的連帯経済の中核に協同組合が位置付けられています。協同組合・小さなつながりから未来がひらけることを本号を通して共有できればと思います。

5つの《事例報告》は、東海交流フォーラムから各地域の事例報告の紹介です。

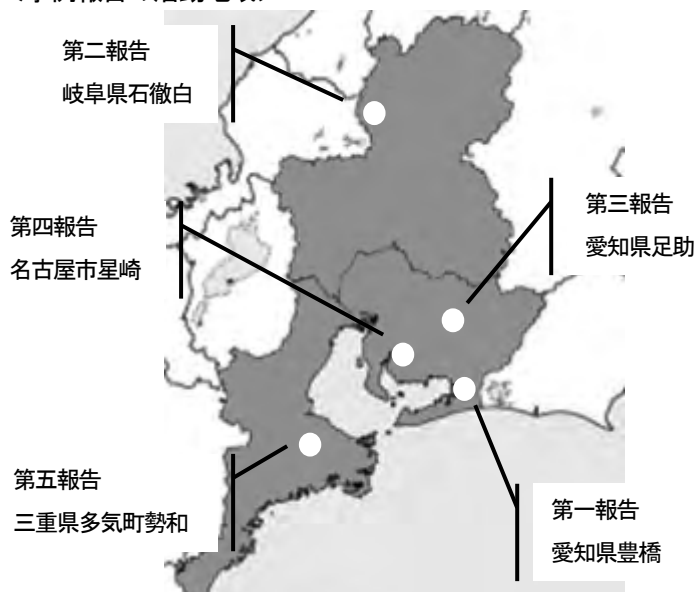
第一報告《三河の事例報告P11》では、三河地域懇談会のあゆみとして三河地域の「つながりづくり」と今始まった「豊橋市における“ちょいボラ”活動」、第二報告《岐阜の事例報告P15》では、岐阜県石徹白の小水力発電導入を通じた地域自治再生、第三報告《J A愛知厚生連報告P19》では医療機関（足助病院）を拠点とした地域コミュニティ、第四報告《尾張の事例報告P23》は南医療生協・星崎ブロックのささえあいいたすけあい地域だんらんまちづくり、第五報告《三重の事例報告P27》は立梅（たちばい）用水を軸とした地域資源を活かしたまちづくりの紹介です。

そして、東海交流フォーラムを受けて、NEWS編集委員会・座談会の様子を紹介しました《P31》。

本号が読者の皆さんとともに、よりよいくらしをつくる地域のつながりを育て励ます一助になれば幸いです。

なお、報告者の役職名は東海交流フォーラム（2016年1月）、編集委員の役職名は2016年4月時点です。

＜事例報告の活動地域＞



《基調講演》

小さな協同・新たな協同で拓く 地域の未来

～第35回日本協同組合学会・岐阜大会に学ぶ～

荒井 聡



岐阜大学応用生物科学部教授・地域と協同の研究センター理事

はじめに

昨年10月に、日本協同組合学会岐阜大会2015が開催されました。東海3県では25年ぶりで、岐阜県では初めての開催でした。いろいろなことを勉強しましたが、特に印象に残ったのは、“小さな協同、新しい協同、これが新しく地域を切り拓くことが実感でき、認識できた”ことです。とかく、学会というと堅苦しい印象で、確かにそういうところもありますが、全体を聞いていただくと理解しやすいのではないかと思います。よろしくお願いします。

岐阜大会の内容

お話しする内容は、岐阜大会はどういう内容で開催されたかということです。今回は、「小さな協同・新たな協同」に関わって、3日間通しての開催でした。

一日目の「地域の暮らしと協同組合の役割」をテーマとした地域シンポジウムでは、岐阜県の協同組合から報告をいただきました。そこでの話を紹介したいと思います。

そして、二日目のシンポジウムでは「未来社会にむけた協同組合の選択」をテーマに、今、社会的に協同組合がどのような役割を期待されているか、日本だけではなく、韓国とかいろいろな国での協同組合の役割が議論されました。抽象的な話になりますが、エッセンスだけ紹介します。小さな協同が社会的連帯経済というようなものの中に位置づけられています。規制緩和が進む中で困り事の発生が必然化します。市民の方々が協同して助け合っていくというようなことがすすんでいるということもお話します。また、学会では、特に優れた研究、実践を表彰する制度があります。めでたく、今回、東海の地から出版された書物が受賞の対象となり受賞しました。この内容について紹介したいと思います。

いずれもキーワードは「小さな協同・新しい協同」です。そこに新しい人のつながりがついてきます。そういうつながりが新しい経済をつくり、地域を拓いてきます。そんな全体の流れになっています。その内容の紹介の後、まとめと考察ということで、私の独断も入りますが、今日における協同組合の新たな役割、小さな協同が地域の未来をつくっていくんだということを確認していきたいと思います。

大会は3日間で開催しました。通常は10月下旬に開催していますが、それでは鶺鴒が終わってしまうため、10月の初めに行いました。一日目の午後に地域シンポジウムを開催しました。二日目は、午前に個別論題の報告・テーマセッションを行い、午後に大会シンポジウムを行いました。三日目は、美濃酪連の工場見学等を行い、イベントとして鶺鴒船を借り切り、岐阜を楽しんでいただきました。3日間通して参加された方は、「岐阜には宝物がある」「また来たい」「来年も岐阜で」と話され、うれしく思いました。

I 「地域の暮らしと協同組合の役割」について ー地域シンポジウムから（一日目）ー

地域シンポジウムは、開催地の事例から、協同のあり方を考えるという企画です。4名の方の報

告をいただき、2名の研究者にコメントをいただいてすすめました。

一つ目は美濃酪連の報告です。生協の中でも主力の商品となる協同の歩みとして、生産者と消費者をつなぐ活動をしているという話でした。

二つ目が、岐阜県森林組合連合会の林業での情報化の取り組みという話でした。なかなか林業の話は馴染みがありませんが、どのように林業が行われているのか、現場のリアルな映像を使って、話をさせていただきました。

そして、三つ目は地元のJAぎふから、「地域に広める協同組合と広報の役割」をテーマに話をいただきました。去年は、農協改革が言われる中、農協のあり方が大きく問われ、食と農を基軸に、地域に貢献する協同組合として実践に取り組み、地域にいかに関与するかを心がけているということでした。

四つ目の報告は、去年の東海交流フォーラムでも紹介がありました、JAめぐみのとコープぎふが協同して取り組んでいる買い物支援の取り組み、コープぎふ多治見支所の取り組みをお話いただきました。

前提として、グローバリゼーションの進行のもとで、地域産業の空洞化がすすみ、過疎化がすすむ「構造改革」政策により、地域における生活基盤がゆらぎ、特に中山間地域での問題が指摘されています。そうした中で、地域にある宝物を最大限活用しての商品開発や、商品を通じた生産者と消費者との交流の深まり、そういうことが生活基盤のゆらぎと並行して進んでいます。また、これまでの支え合いやつながりを基礎として、新しい協同の取り組みとして買い物支援等が同時に進行しています。こうしたことが、どう地域で展開しているかということを、まずは実態から検証しようと思いました。

地域の内発的な協同の取り組みにより、暮らしと経営がどう支えられているか、岐阜県下の実践例を中心として考えていき、もって、今日における地域の暮らしと地域産業の振興に果たす協同組合の役割、協同組合間提携の課題についても考えました。また、この視点から、政府の成長戦略、

地域シンポのねらい

- ・ グローバリゼーションの進行、地域産業の空洞化、過疎化「構造改革」政策により、それはさらに加速地域における生活基盤のゆらぎ、特に中山間地域。
- ・ 地域資源を有効活用した商品開発、生産者と消費者との交流の深化、商品開発への消費者の参画支え合いを基礎として、新しい協同の取り組み 買い物支援など、→ 生活や経営の自立を支える新たな仕組みが創造
- ・ こうした地域内発的な協同の取り組みにより、暮らしと経営がどう支えられているか、岐阜県下の実践例を中心として考えていく。
- ・ もって、今日における地域の暮らしと地域産業の振興に果たす協同組合の役割、協同組合間提携の課題についても考える。
- ・ また、この視点から、政府の成長戦略、規制緩和策等が、地域の実態にあった提起なのかどうかについても検証する。

規制緩和策等が、地域の実態にあった提起なのかどうかについても検証しました。

同時に、昨今の農協改革に示されるような、協同よりも効率だという風潮が、果たして現場の実態にあったものなのか、同時に検証しました。

そういう視点で岐阜の協同組合を見た場合、それは組合員とその家族の暮らしと経営を守り、発展させることができるように、総合的に展開してきました。岐阜県の場合は、今から24年前になりますが、1992年に岐阜県協同組合間提携推進協議会を発足させました。そこでの協同組合間協同、協同組合間の交流等を通じて、地域社会への貢献を促進し、それぞれの組織がさらに発展する道を歩んできました。組合員数が合計でのべ87万人（2015年3月現在 重複加入含む）になります。これは単純計算で、岐阜県の人口の42%くらいが協同組合の組合員ということです（酪農協142、森林組合59千、生協486千、農協324千）。そこまで拡大してきました。そうした中で、いろんな地域課題が山積し、それにどんなふうに対応をしたらよいか焦点となっています。

今、地域には、経済の空洞化、過疎・高齢化、競争激化、格差、つながりの希薄化、経営不安定化、食の安全・安定供給への不安、買物困難などの課題があります。そして協同組合でも、組合員の多様化、他業態との競合・競争、経営問題などの課題をかかえています。こうした中で協同組合間協同・提携により、地域課題に対してどう対応するかが、新たな課題として投げかけられています。

一つ目はそうした協同組合間協同の歩みの中で、提携商品が開発されていることです。

提携商品が組合員に利用されています。岐阜の場合は、生協牛乳、米、小麦粉、ハム、ソーセージ、ケイちゃん等のシンボリックな商品があります。

岐阜県協同組合間提携商品

提携商品	提携組織	2014年 取扱高 (百万円)
1. 米(精米・玄米等) レンゲ産米・ハツシモ 恵那にかり 奥飛騨産 郡上のコシヒカリ いび川のひとめぼれ	JA全農岐阜 JAにしみの JAひがしみの JAひだ JAめぐみの JAいび川	242.1
2. 県産小麦粉	JA全農岐阜	0.5
3. 明方ハム・ソーセージ	JA全農岐阜 JAめぐみの	29.2
4. 若鶏のケイちゃん	JA全農岐阜	26.2
5. ハツシモ炒飯	JA全農岐阜	5.0
6. せいきょう牛乳・乳製品	美濃酪連	614.0
7. 高賀の森水	県森連 JA全農岐阜	0.5

代表的なものは、美濃酪連と生協の間で提携された「せいきょう牛乳」

中でも、代表的なものは、美濃酪連と生協の間で提携された「せいきょう牛乳」です。せいきょう牛乳は売り上げとしても、協同組合の歴史の中でも大きな位置を占めています。美濃酪連は、美濃に事務所があり、工場があります。協同組合学会の三日目に行ったエクスカージョンでも工場見学をしました。美濃酪連の売り上げ41億円のうち、生協の占める割合が4割あります。美濃酪連は1969年から生協との関係が始まりました。とても深い関係があります。その特徴として、「①顔が見える、②交流会を実施している、③商品開発を組合員と一緒にやる、④安全安心にこだわる」という4つの基準を満たして商品づくりに努めていると紹介がありました。乳牛を育てる酪農家がわかり、酪農家に大切に思っていることを伝え、職員の研修で理解を深め、そして、職員は自らの言葉で組合員に伝えるということが強調されていました。商品開発も組合員目線で検討を重ねて行っているということです。特に印象に残っていることは、生協が岐阜県の酪農家とともに活動して、県産牛乳を守り続け、地域の酪農家が生産した牛乳を地域の組合員に届けているということです。酪農家の思いを伝える大切さ、人とのつながりな

どお金では買えないことを生協と美濃酪連では取り組まれています。単に経済的な便宜の追求ではなく、つながりをベースにして経済をまわしているといったことが印象に残りました。

二つ目に、林業の話

日本で2番目に山の多い岐阜県。水の保存量は全国一。

あまり参加者は林業の実態を知りません。私も専門が農業経済学ですが、その実態をよく知りませんでした。木こりのイメージを持っていましたが、「全然違います。」と言われて印象に残っています。1964年の木材の全面自由化で、国産材は減少の一途をたどってきました。実は、50年くらい経った木が一番伐り出し頃だそうですが、そういう木がいっぱい残っているということです。

今は、植えることより木を伐り出して利用することが急務だということです。同時に、若い人が林業に参加できるようにして山を守るために、林業の近代化を図ろうとしているということです。近代化の一つとして、機械化と同時にIT技術を活用して境界を明確にするなど作業をしやすい環境をつくる事を、森林組合としてつくりあげているということです(右写真)。それが重要な課題



となっていて、効率的に山林を管理して、それで林業を3K産業からスマート産業にしたいということです。特に岐阜県は日本で2番目に山の多い県です。高知県に次いで森林率が2番目に高い県です。山という貴重な財産があり、海拔0mから3000mまであり、標高差があります。これは位置エネルギーがあるということです。水の保存量は全国一です。昭和20年代には、そうした岐阜県の特性を生かして、小水力発電を政府が力を入れて奨励していました。それが、エネルギー政策が変わり、石油に代わり、原発に代わるということでその流れがなくなってしまいました。今、再び見直されて、新しい県の計画でも将来20個

くらいの水力発電がつくられるような、そんな計画が立てられています。

三つ目にJAぎふの取り組み

中小規模の農家の支援策に力を入れ、いろいろな事例を紹介

都市近郊において市民との関わりを強めていくということが強調されていました。まずは、地域に根ざした農業振興による持続可能な農業の実現ということです。岐阜県には規模の拡大が容易ではない地域が多くあります。規模を拡大して、広い土地で農業ができるのは、岐阜県では南部にある海津地域で、その一部の地域しかありません。そういう意味では、中小規模の農家がこれからも農業の主体になります。そういう中小規模の農家の支援策に力を入れています。そのようないろいろな事例を紹介していただきました。その中で、今、直売所が人気です。私も直売所歩きが趣味の一つです。直売所に出荷する生産者のため、農協が主導していろいろな農業塾を行い、出荷者をたくさん育成しています。さらに、二つ目に暮らしの協同活動です。これにも力を入れています（下写真：「女性部フェスタ」の開催、高齢者施設での奉仕活動、芋煮会の様子）。管内の農家はほとんど農協に

加入しているので、ほぼ地域のすべての方が加入しています。そう



いう基盤をうけて、高齢者施設の奉仕活動を積極的にしています。参加者の喜ぶ顔を見て「協同活動の原点を感じた」と感想が寄せられているということです。地域貢献活動ということで、いろいろなまちづくりの活動を支援する基金を設けています。総合農協としての経営基盤が確立しているから、地域貢献活動ができるのではないのでしょうか。政府は「経済性だけを追求する」、そんな提言をしています、地域が求めるのは農協の総合性だと思います。

四つ目に八百津町久田見地区

買い物支援の取り組み

協同組合間協同が浸透して、生協と農協が一緒になって、こういうことが取られるようになったことは大きな意味があると感じました。農協職員向けに生協（コープぎふ）の説明をするということ、驚きをもって参加者が聞いておられました。基本的な考え方として、住民が主人公ということ、協同組合同士が共有し、主人公がそこで暮らすために何をするのか、それを出発点にして事業を展開するということで、垣根がとれます。地域で孤立する人をつくらないという思いでこういう事業が新しく成立するということです。まさに小さな協同、新たな協同と言っていいと思います（右写真：久田見地区・買い物支援の取り組み）。



こうした買い物難民は、中山間地だけでなく都市部でも広がりつつあります。都市部に対して、くらしたすけあいの会、おたがいさまの会、そういう組織が各地域につくられています。その組織を活用して、支え合いの取り組みがされているということが最近の特徴です。小さな協同、新たな協同、新たな関係づくりと言っていいと思います。内容的には、コミュニティや人と人のつながりを再生する、そんな取り組みとしてたすけあいの会が形成されています。そういう実践的で貴重な内容をもっています。そんなこともあって、この度、コープぎふ「たすけあいの会」が日本協同組合学会の実践賞を授与されました。ともに喜びたいと思います。

※森林組合、芋煮会の様子、久田見地区・買い物支援はシンポジウム発表者から提供された画像を掲載しました。

まとめとして

協同組合の本質的な使命、役割として、地域に根ざして貢献する、それは事業を総合的に行っているからやれることです。現場は地域を志向していて、必ずしも、単なる経済採算とか、輸出拡大

など、政府のめざす方向とは違うことを現場が求めていることを実感しました。地域の魅力を再発見し、事業を通じて願いに応えていくことを情報発信することが重要になっています。若い人を生産現場に戻す取り組みが求められています。岐阜県は全国からいろいろな若い方が農山村に入ってきています。その流れを加速していくことが必要です。シンポジウムの中でも話題にしたのは、市民が農林業にどう参加するか、組織間の連携を強めて、地域に貢

献する新たな協同を自主的に地域の中で考えることが大事ということです。その後、感想文等



も書いていただき、貴重な意見をいただきました。印象に残っていることは、新自由主義の弊害をなんとかするのは、協同組合の役割ということについて、「絵空事と考えていたが、この地域シンポジウムに参加し、会場のやり取りを聞いて、ちょっと現実味を帯びてきた」との感想をいただいたことです。それは小さな積み上げが、いろいろな矛盾を、一つ一つつくりかえる力になっていくだろうという意見を、会場からいただきました（写真：協同組合学会岐阜大会地域シンポジウムの様子）。

Ⅱ「未来社会にむけた協同組合の選択」について —大会シンポジウムから（二日目）—

協同組合学会岐阜大会の大会シンポジウムは、「未来社会に向けた協同組合の選択」がテーマでした。地域シンポジウムは地域の実践者の報告でしたが、これは研究者の報告です。言っている内容は難しいかと思いますが、ほぼ地域シンポジウムの内容に通じるものです。「学習しない組織は滅びる」ということも言われています。ぜひ、学習の対象にしてもらえればと思います。

大会シンポジウムの内容は、四つほど

ここではポイントだけ紹介したいと思います。

韓国の協同組合

まさに小さな協同、

これを社会経済として組織化する取り組み

一つは韓国のiCOOP協同組合研究所の金享美（キム・ヒョンミ）氏から報告された韓国の協同組合の話です。韓国は日本以上に競争の激しいところですが、いろいろな社会問題があり、競争の弊害があるということが韓国の中で認識されて、市場経済ではないもう一つの経済をつくるのが重視されてきたということです。4年前に国際協同組合年があり、そこで韓国は協同組合基本法を作りました。いろいろな協同の取り組みを支える組織、経済の仕組みができました。ひとことで言うと社会的な経済、NPO、労働者協同組合など、いろんな組織をこの法律で支えています。この法律ができて6千くらい新しい協同組合ができました。健全たる共同体をつくり、格差をなくすことに貢献する韓国経済の新しい代案とするということです。今日のテーマのまさに小さな協同、これを社会経済として組織化する、そんな取り組みだと思います。

多様な協同が生まれています。いろいろな協同組合ができて、協同組合同士連携し合う関係もあります。それを協同組合の生態系と呼んでいます。協同組合の枠を超えて連携し、縦横に、組織同士のつながりが作られてきています。これも小さな協同、新たな協同です。そういうつながりの中で、弱い社会的な紐帯を克服して、共同体を強めようとする動きになっています。こんな取り組みをすすめているということが特徴です。

鹿児島国際大学・馬頭忠治氏の報告

若い世代へのアプローチ

二つ目は鹿児島国際大学・馬頭忠治氏の報告です。若い世代へのアプローチが印象的な報告です。国家と市場と市民社会の3層構造の中で、協同のあり方を提起しています。市民が協同していればいいのではなく、国家のあり方にも広げ議論しています。新たな市民社会が歴史的に発生するのは必然であり、新しい協同が社会変革の動きとして台頭しているということです。他者と関わり、交流し、協調する活動が今広がっていて、経済にとられない、脱経済化を志向するという動きが生

まれており、そういうネットワークの中で新しい価値が創出されているということです。様々な市民のアソシエーションが開発されて、それが持続可能な社会づくりに貢献しています。日本の若者は追い込まれていますが、新しい関係性はつくられているということです。これも小さな協同になると思います。

三つ目は、富沢賢治氏の報告

つながりで制度の隙間を埋め、地域・生活の分断に対し、循環型社会をつくる

一橋大の名誉教授であり協同組合研究の大御所です。それまでの話を総括して、協同組合は、社会的・経済の諸組織のなかでもコミュニティにもっとも密接に結びついて、生活上の諸問題を解決するために活動していること、そしてその生活問題の解決のために、他の社会的・連帯経済組織と国家と営利企業を結びつける結節的に位置するということなど、重要な指摘をされています。いろいろな社会的連帯経済が広がる中で核となるのが協同組合だと、いろいろな国々の社会的な実践事例も語られています。さらに、これからの課題は、日本協同組合連合会をつくること、日本に韓国のような協同組合基本法をつくり、地域社会には社会的な連帯ネットワークをつくるということを提起されていました。まさにこの地域と協同の研究センターは、このネットワークづくりの核となるべき組織だと思います。

最後に地域と協同の研究センターの向井忍氏が、「『生活の協同』と生活協同組合の役割・制約・可能性」として、生協と「市場」、「公」、「社会」の3つの視点から話され、社会的な連帯経済の多様な関係者、「全体最適」構築への同意・共感・参画を得ることが強調されていました。つながりで制度の隙間を埋め、地域・生活の分断に対し、循環型社会をつくるという、非常に重要な指摘をされました。

大会シンポジウムの後、地産地消づくりの交流会を行いました。交流会の前に、学術賞と実践賞の受賞式がありました。小木曾先生が代表して会長より表彰状が渡されました。

最終日はエクスカージョンです。一日岐阜を堪能していただきました。行程の最後には、コープぎふ芥見店を見学しました。鵜飼いは、12月に世界農業遺産に登録されました。20人乗り船を借り切り楽しんでいただきました。

Ⅲ「未来を拓く協同の社会システム」

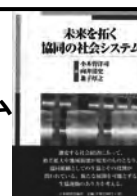
—学術賞（共同研究）から—

学術賞の表彰がありましたので紹介します。本著書の問題意識として、地域シンポジウムなり大会シンポなりで提起したことが全体貫かれていると思います。価値のある書物であると評価されました。これも学習していただきたいと思います。

Ⅲ学術賞（共同研究）： 『未来を拓く協同の社会システム』

序章 生協運動への期待(小木曾・兼子)

- ・ 経済のグローバル化とそれに対応した新自由主義政策により、国民国家の福祉国家への移行枠組みが放棄され、これにより社会的な負荷と矛盾が深刻
- ・ その矛盾から生み出された弊害を市民の側から解決すべく多様な市民協同組織が広がっている
- ・ 競争至上主義での比較優位性と経営構造の強化に腐心し、組合員を顧客対象化する」ベクトルではなく
- ・ 「地域社会に対して価値ある生協の社会文化、生活文化を発信し、創造する」オルタナティブ



要点は、経済のグローバル化の中で引き起こされている弊害を、市民の側から解決するというものです。多様な市民の協同組織が広がっていて、これはまさに、小さな協同、新たな協同だと思います。それは競争至上主義での比較優位性と経営構造の強化に腐心し、「組合員を顧客対象化する」ベクトルではなく、「地域社会に対して価値ある生協の社会文化、生活文化を発信し、創造する」オルタナティブです。これを創造的に作り上げていくことが、今非常に重要なのだということです。

全体が、2部構成で、1部は研究者の6つの論考です。1章では、期待される第三段階の生協運動として、生協の事業執行ベクトルを現場発の参

加型価値創造に転換する、倫理的消費・経済のもとに倫理的な価値観を持つということが述べられています。これは、内山節さんの「半市場経済」に通じるものがあると思います。生産者との共創的商品開発、非営利事業体とのネットワークの拡大などが再生の導きの糸になるという、まさに、新しい、小さな協同に着目した視点を持つということが打ち出されています。さらに、生産者との小さな協同の視点で生協の役割なり、地域社会での活動のあり方などが述べられております。

福祉分野では、朝倉美江先生が生協の福祉について執筆され、分断社会からつながる社会へつくり直すこと、コミュニティを中心にした利用者参加、自治的行為について述べられています。実践の中で得られた重要な論点が提起されています。

そして2部は、東海モデルの模索として、実践の場から組織の代表者が、重要な現場をふまえて

IV まとめと考察

小さな協同・新たな協同から拓く地域の未来！

地域社会において、協同組合は倫理的消費などを実践する大きな役割があります。社会的連帯経済の中核に協同組合が位置付けられていると思います。講演時間がなくなりましたので詳述はできませんが、論点は、「すべて国民は個人として尊重される（憲法13条）」ということです。日本国家はこの理念に基づいて、社会福祉などを実施しています。

これは、まさに生協事業そのもので、その理念のもとに運営されていると思います。その連帯の積み重ねが公共社会をつくります。それは非常に手間がかかりますが、小さな積み重ねが新しい地域社会をつくるということ、これは確信をもっていいと思います。個人を見捨てる国家から、尊重する国家へ、これが小さな経済のつながりの延長に必ずつながっていくと思います。資料にポイントをお示ししていますのでご参考下さい。

小さな協同・新たな協同から、地域の未来が拓けるということです。ご清聴ありがとうございました。

まとめと考察① 仕事・地域経済

- ・ 地域資源を有効活用し、小さな経済をたくさん創造する
- ・ 地域の資源を活用して、組合員参加による商品開発を進める
- ・ 交流：顔の見える関係から、暮らしの見える関係へ。
- ・ 小さな経済は家族経営、中小企業が担う場合が多く、協同・協同組合がこれを支える
- ・ 地域での生産者・生活者の要求は、食・農、経営、福祉、医療など多面的に渡り、協同組合も総合的な事業展開が期待されている

まとめと考察② 地域社会での協同組合の役割・課題

- 商品事業:「価格重視」から「品質・安全・安心重視」の潜在的な要求に応えきる。倫理的消費。
- 営利企業との同質化傾向の課題を克服し、新たな価値創造。公益性確保。
- 商品事業の外延に生活事業。コミュニティの再生、つながりの再生。
- 組合員の多様化、格差の進行に伴う「価格重視」の強まりへの対応。
- 「生活協同組合:東海モデル」の具体化、多様な関係者の「全体最適」。
- 新たな協同の関係を作り出し、効率良く要求に応じていく
協同組合間協同、協同組合と地域との協同、くらし助け合い・・・
- 社会的連帯経済の中核に協同組合、中間・メゾ領域でのつながり
- これからもつながりをずっと大切にする

まとめと考察③ 国家・企業・市民と協同組合

- 地域課題、生活問題の原因としての新自由主義 資本の論理
- 「すべて国民は、個人として尊重される」(憲法第13条)
日本国憲法のいちばんの肝心(樋口陽一『個人と国家』)
一人一人のかけがえのない個性の尊重が「個人の尊厳」の本質的な要素。そういう個人が他の個人を尊重し合って、手をつなぎ合う連帯。その連帯が公共社会をつくる。この積み重ねは非常に手間暇がかかります。
- 協同組合は、生活問題の解決のために、他の社会的・連帯経済組織と国家と営利企業を結びつける結節的に位置(富沢)
- 社会的矛盾の止揚主体としての市民への期待 生活の論理
- 個人を見捨てる国家から、尊重する国家へ。格差よりも平等。
- 企業国家から福祉国家へ。競争よりも共生。

まとめと考察④ 小さな協同・新たな協同から拓く地域の未来！

- 資本主義市場経済の特質 技術構成高度化・利潤率低下傾向
格差・賃金抑制、共同体の解体・孤立、生活問題発生 of 必然化
- 生活問題をめぐる二つの道 歴史的転換点。
 - 市場万能(狭義の経済学)、企業中心
格差・過疎・孤立・環境破壊・軍拡・改憲・原発依存
 - 市場経済の相対化、「半市場経済」(広義の経済学)連帯経済
平等、他者への配慮、環境保護、軍縮・護憲、自然エネルギー
- 協同組合の価値を実現するための運動、その具体化としての事業
- 小さな協同・新たな協同から拓く地域の未来！
協同組合は、自助、自己責任、民主主義、平等、公正、連帯という価値を基礎とする。協同組合の創設者たちの伝統を受け継ぎ、協同組合の組合員は、正直、公開、社会的責任、他者への配慮という倫理的価値を信条とする。

荒井先生 コメント

本日のフォーラムでは、世代を越えたつながりもあり、大きな意味を感じました。また日本協同組合学会で二つの学会賞を、この地区から輩出できました。これは東海地区の協同組合、協同の実践、研究は日本でも最高水準に近いことを示していると思います。今回の成果を、私たちは、胸を張ってこれからの糧にしたいと思います。小さなつながり、時間はかかるかもしれませんが、必ず次の力になると思います。それは地域から、地球レベルでのつながりという話もありました。今日学んだ若い人は協同組合のことを理解できたと思います。協同組合に就職しようという人もいます。東海に住んでよかったという人が増えるとうれしく思います。貴重な機会をありがとうございました。

《三河地域の事例報告》

三河地域における「つながりづくり」活動（三河地域懇談会のあゆみ）と今始まった「豊橋市における“ちょいボラ”活動

「三河地域懇談会」世話人 田所 登代子

「とよはし“ちょいボラ”の会」代表世話人 水藤 典子



◆三河地域における「つながりづくり」活動 （三河地域懇談会のあゆみ）

「三河地域懇談会」世話人の田所登代子です。三河地域懇談会のあゆみを紹介します。

三河地域は、山、川、里、海と自然が豊かな地域です。三河と一口で言っても、いろいろな地域でいろいろな人々が、いろいろな活動、営みを行っています。愛知・岐阜・長野の3県の県境、奥三河から、菜の花咲きあふれる渥美半島、かつて穂の国と呼ばれた東三河、日本デンマークと呼ばれた西三河の田園地帯、穏やかで海の幸豊かな三河湾、歴史や文化、先人の知恵をたどる学びを行っています。

いろんな団体、組織、人と一緒に、いろんなことをやってきたのが三河地域懇談会の特徴です。いろんな地域で、いろんな人たちがやっていることを学ばしてもらおう。出かけて学ぶことが、

第3回 ケアコープ蒲郡にて 2007年2月18日
リレートーク
懇談分科会 ①ものづくり、商品づくり、農と食育 ②福祉 ③子育ての不安
や子どもの安全について ④三河湾のこと知ってる?! 身近な環境について
⑤他



自分の地域のことを知ることに繋がります。かなり努力してやってきました。最近では、三河湾に浮かぶ佐久島にもでかけました。（写真：第3回「ケアコープ蒲郡」にて2007年2月18日リレートーク）

「名古屋中心の研究活動では参加できない」という声が多々あり、研究センターと地方との関係はどうあったらいいのかという話し合いも行ってきました。もともと研究センターをつくる時に大切にしてきた考え方に、「専門家が集う研究所ではなく、実践者自身の研究をしたいということ」がありました。地域で地域の人がやるのが大事、三河の地で学びの場をつくらないと研究センターにはならない。そういうことで、三河地域での取り組みが生まれました。2002年に三河地域の研究センター会員が集まり、NPOについての勉強をしたのがその始まりです。

毎年、三河地域懇談会では、農と食育、福祉、三河湾の環境等のテーマを掲げたり、会員の自由懇談をしたりしてきました。コープ餃子事件、東日本大震災等その時々の中での動きにあわせた取り組みも行っています。地域住民のくらしの安全を守る取り組み、例えば水害の起きた岡崎市の事例や、海辺の蒲郡市の取り組みにも学びました。

2009年度の「山のくらしに学ぶ」懇談会から、有志で一泊するオプション企画に取り組

みました。座学を行い、現地で自分の目を見て、耳で聞き、感じることに一緒に、その地域の食を共にすることを大切に、フィールドワークを行っています。

はじめてのオプション企画 奥三河の伝統に触れる



新城四谷の千枚田、一枚一枚の小さな田んぼは、先人が石を積み上げたものです。今もその千枚田を守る取り組みが続いています。

豊川・矢作川の上下流と三河湾の環境やまちおこし、奥三河、足助、渥美半島、豊川稲荷、佐久島などの文化・歴史を学習・調査しています。

第7回の「渥美半島に学ぶ」企画、基調講演は市野先生の三河湾の環境問題でした。「苦潮」という言葉をここで初めて聞いた方も多く、オプション企画では三河湾の埋め立ての状況を山の上から見ることができました。伊良湖岬の先端まで行き、バーベキューにありついたときにはとっぷり日が暮れていました。三河地域懇談会恒例となりました夜の学習会も行われ、渡り鳥について学び、翌早朝には、一部の人を残しサシバの渡りを見に出かけました。

今の世の中で、平和が大事だということを強く思います。私たちは、地域・協同を考えると、その前提として平和がないといけなく考えます。三河の地域では、「平和・暮らし」を通じてつくられた幅広いつながり・息長い歩みがあります。渥美半島に戦跡がたくさんあることをご存知ですか。1901年、伊良湖試射場建設が着工、1905年に伊良湖岬村住民は全戸移転を強いられました。伊良湖に縁のある

柳田国男は「願わしきものは平和なり」と言いました。以降、富国強兵のための国策として、伊良湖の軍事拠点化はますます、すすむこととなります。監的場などの戦争遺跡が数多く残っています。伊良湖灯台は試射の障害にならないように波打ち際に作られたため戦争遺跡といえるのではないかとすることも学びました。

2011年の第8回懇談会では、足助の町並保存について学びました。足助の町は愛知県では唯一、重要伝統的建造物群保存地区に指定されています。塩の道、五平餅など、地域の特徴を学び、オプション企画ではその町並を歩きました。バーベキューの締めは五平餅です。

第9回は東日本大震災の翌年。「知ろう・学ぼう・考えよう 明日の地域・暮らし・つながり」と題して、開催しました。基調講演は「災害の時代を生き抜く力 一海からの提言」。大阪大学の青木伸一先生のお話をお聞きし、高潮は台風が去ってからの方が危険ということも学びました。実はこの日は台風19号が近づいていました。オプション企画で佐久島に渡ることになっている私たちに、先生は「勇気ある人たちですね」とおっしゃいました。佐久島では「島を美しくする会」の鈴木さんのお話をうかがいました。翌日は、残念ながら朝一番の船で戻りました。翌年、日帰りですが、再び佐久島を訪れ、島の取り組みに学びました。

リベンジ企画 2013年4月22日 「佐久島へ行こう!!」



第10回は、「豊川市のまちおこしに学ぶ」をテーマに、「豊川いなり寿司で豊川市をもりあげ隊」の隊長のお話をお聞きしました。豊川市は、いなり寿司発祥の地のひとつともされ、市内に多くのいなり寿司店があり、それぞれ独自に工夫をされています。その他、「穂の国の

歴史入門」と「東三河の戦跡を通して平和を語り継ぐ」お話もありました。オプション企画では、地元豊川稲荷に詣でて、あらためて地元のことを知らないことに気づかされました。

2014年度から16年度の3年間は、協同のある未来の暮らし・地域づくりをめざして、活動テーマを「私たちの暮らしと介護～地域で絆な老い支度を！～」と決めて活動中です。

南医療生協のよってって横丁の見学会では、真新しい施設を生き生きと案内をしてくださる南医療生協の組合員のみなさんに感激しました。どんなところで、誰と老後を過ごすかは誰もが気にしている大事な課題です。認知症サポーター養成講座も開催しました。あらためて地域で老後を過ごすために私たちにできることを考え合いました。

奥三河の助け合いに関しては、北設楽郡の「のき山学校」にお邪魔し、見学、交流をさせていただきました。よそから来て山で活躍する若い人たちに期待できたことが収穫です。



のき山学校 北設楽郡

六条潟・設楽ダムなどの現地にも出かけて、豊川や三河湾の環境問題についても学んでいます。愛知県のアサリ漁獲量は全国シェアの6割近く、全国1位です。しかし、アサリの住める流域が少なくなっていることを、豊川を遡って見ることができました。

気がつけばこの10数年、おいしいものを食べながら、大いに学び、語り合ってきました。引き続き、私たちの地元を巡りながら、学びを広げ、考え合う仲間を広げていきたいと思います。今後ともよろしくお願い致します。

豊橋市のちょいボラの会のことは、このあと水藤さんをお願いします。

◆今始まった「豊橋市における“ちょいボラ”活動」

みなさん、こんにちは。とよはし“ちょいボラの会”の代表をしています水藤と申します。

私は、かつて生協の理事をしていました。ちょうど合併の時です。コープあいちがどのようになるのか気にしながら、その流れで福祉政策委員会のメンバーに入りました。朝倉先生のご指導をいただきながら、2013年の夏ごろに、豊橋と春日井の地域に、福祉のモデル地域をつくることになりました。始めの頃は、10人くらいでどうしようと思いながら活動を開始し、「豊橋地域の福祉を考える会」の名称で立ち上げました。困ったことに出会いながら、どのくらいの区域でやろうかと検討するうちに、とりあえずは、地域の人たちは、どんなことに困っているのだろうと、アンケートをとりました。ヘルパーさんに協力してもらいながら、生協の地域包括支援センターの人にも聞いたりしてきました。

高齢者だけでなく、障害者、子育て中のお母さんも、いろいろ困りごとがあることが分かってきました。特定の居場所だとか、おたがいさまなどの取り組みは、町内、小学校区等限られた地域で、本当に困っている人たちは、まだたくさんいるだろうと、欲張って、豊橋全域に広げ、豊橋にある22中学校区を基点にやっていくことにしました。でも何ができるか、たいそうなことはできないが、ちょっと困っている人はたくさんいるから、ちょっとした困りごとを援助するボランティアをやっていこうと途中から「とよはし“ちょいボラ”の会」という名称を考えて、今に至っています。

具体的にどんな事ができるのか、地域で求められていることは何か、話し合いを続けました。



はじまりは、生協福祉政策委員会でしたが、朝倉先生に指導され四苦八苦しながら、2年くらい

かけて、どんな形にしようか、相談して、やっと去年の7月に形ができて、「とよはし“ちょいボラ“の会」を立ち上げることができました。運営していくためにはお金が要りますが、私たちには何也没有什么。生協の福祉基金があると聞き、応募して10万円いただくことになりました。それを元手に、準備をすすめました。連絡をするために携帯電話が要ります。その携帯電話を買ったり、市全体に広げたので、依頼があった時に家どこか探せるように、ゼンリンの高い地図を買ったりしました。10万円は有効に使わせていただきました。

発足集会を7月に行いました。私たちが、こういうことがありますとお願いに行ったので、70人くらいの方が発足集会に集まってくださり、新聞社も思いがけず、6社もきましてニュースを流してもらいました。そういう形で始まった“ちょいボラ“の会が、ボランティアをお願いするとき、「こんなことに注意しよう」というのが以下の心得です。

とよはし ちょいボラの会 ボランティアの心得

- ☐活動は初めに決めた内容にとどめ、やりすぎないようにしましょう。
- ☐活動上、知り得た依頼人の情報は他言無用です。
- ☐依頼人に自分の電話番号はお知らせしないようにしましょう。
- ☐都合で活動に行けなくなった場合、できるだけ早く連絡係に連絡しましょう。
- ☐ボランティアが終了したら連絡係に報告しましょう。
- ☐会の講座、交流会などには積極的に参加しましょう。

とよはし ちょいボラの会 連絡係一同

連絡係・依頼人・ボランティアの役割で、寸劇でわかりやすく説明をしました。



仕組みは、おおむね30分以内で出来る簡単なこと（ボタン付け、電球の交換、高いところの物を下すなど）をして、一回について交通費・通信費として200円をいただくというものです。ボランティアが自転車や歩いて行けるところです。

困った人が窓口で電話をし（連絡係が中学校区ごとに1人はいるのですが、まだ13、4人くらいです）、その連絡係の人が、なるべく依頼人の近くにいる地域のボランティアの人に直接連絡をして行ってもらいます。

これまでやってきたことは、蛍光灯の取り換え、高いところの枝を切るとか、高いものを取るとかです。

まだ依頼は多くありませんが、枝切りの依頼、電球の取り換え、物干しざおの処分などがあります。



そんなことがお年寄りには出来ないんですね。お金の問題がありました。最初は、「ただでよい」と言いましたが、お年寄りはそれを非常に気にします。次に行ったときお菓子をくれたりするので、1回200円もらうことに決めました。新聞に流してもらった時には、多くの電話がきましたが、その後は余りなく、まだ認知度が低く、いろんなところで宣伝をしまして、だんだん依頼が来るようになりました。ボランティアは100人くらいいて各地域に広がっています。「私の仕事がない」と言う方もいます。

歩き出してまだまだですが、高齢者の人向けの豊橋市の広報誌にお知らせしてもらいました。始まったばかりで、つたない歩みですが、これが豊橋全域に広がると色んなことで困りごとの穴埋めができると思っています。

《岐阜地域の事例報告》

小水力発電導入を通じた 地域自治再生をめざして

平野 彰秀

石徹白農業用水農業協同組合参事・NPO法人地域再生機構副理事長



私は、昭和50年、岐阜市に生まれました。実家はコープぎふから車で5分のところで育ちました。大学で東京へ行って、18歳から32歳まで14年間、東京暮らしをしていました。東京にいたときは、外資系の経営コンサルティング会社に勤めておりました。まさにグローバル資本主義の手先のようなところでした。商社の仕事をしていたときに、グローバルな資源はどうなるか、エネルギーはどうなるかを考える機会がありました。その影響から、エネルギー問題とか成長の限界とかを考えていくと、大きくグローバルなビジネスでものごとを解決する方法もあるが、小さなところからやっていくこともあるのかと考え、今の活動をしております。

今日のテーマは「小さなつながりから拓ける地域の未来」です。私もすごくすばらしく共感します。つけくわえると、私がやっていることは、「小さな地域から拓ける地球の未来」というように考えています。小さな積み上げが、地域の未来につながり、地球の未来にもつながるのではないかなと思ひながら活動しています。

今、私が住んでいるところは、岐阜県郡上市白鳥町石徹白(いとしろ)というところです。岐阜県はだるまのような形をしてい



ますが、耳のようなところで、福井県との県境です。実は、昭和33年まで福井県でした。越県合併をして岐阜県になりました。石徹白は「ウイングヒルズ」というスキー場を越えて、まだ先に道

があるのか？という道をそのまま下るとそこにある集落です。郡上八幡から車でおよそ1時間かかります。標高700m。隣の集落から15キロ、今100世帯、270人のまちです。まさに小さな集落、小さな地域です。小学校があり、全校児童は6名です。一学年でなく全校で、です。築135年の家に住んでいます。冬は薪ストーブです。それでもすきま風が入ってなかなか寒いんです。雪が降ると2メートル位くらい積もります。今年は少なくて今60センチくらい、今週降りそうです。そのまま歩いて屋根まで上れるくらいです。



雪が深いのは悪いことばかりではないと思います。小学校の屋根、お寺の屋根、みんなで雪下ろしをします。雪が深い地域だと、支え合わないと暮らせません。地域で「結(ゆい)」の活動が、年に何回かあります。雪下ろしをすとか、家の周りの雪囲いです。雪でガラスが割れないように、囲います。農業用水の掃除、「水普請」といって、春と秋にみんなで清掃をします。そうした地域の活動があり、こういうのが地域のつながりを保つのに役立っているのかなと思います。

とても美しい集落です。私は31歳の時、9年前ですが、ここに行くことがあり住むことになりました。

人口は、縄文時代から1000人くらい、ずっと続いていて、昭和30年代までは1200人。それが今では270人です。全国で過疎化が進んでいますが、非常に過疎化が著しい地域です。ここをどう残していこうかと地域のみなさんは考えるわけです。当時、東京で仕事をしながらNPO活動をしていました。その仲間の中に、郡上市出身の友達がいました。

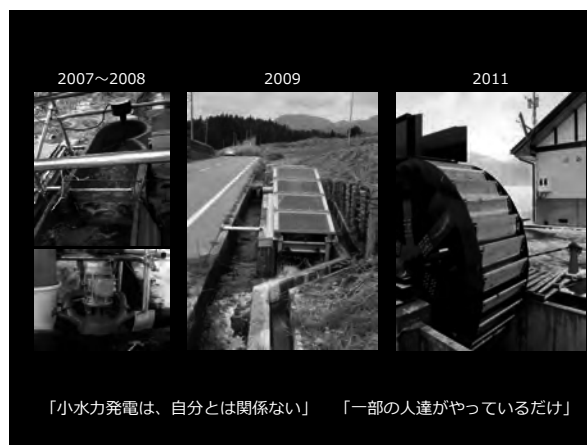
岐阜市民にとって長良川は大切な川です。よくよく調べると上流と下流のつながりが結構あったということがわかりました。例えば、岐阜城の下あたりに、川原町とか、港町とか、材木町の名前があります。それは上流で木を切って筏にして流してきて材木町で水揚げしていました。川湊です。美濃で和紙を作っていますが、下流の岐阜市では、うちわ、ちょうちん、和傘を作ります。農村と都市部のつながりが、川を通じてありました。都市と田舎の地域をどうつなぐか、を考えて、30歳ぐらいの時、議論をしました。なぜ農山村は衰退したのかという話をよくしました。昔は、森もあるし、水もあるし、食べ物もあるから、田舎の方が暮らしやすかった。それぞれの地域でエネルギーもまかなっていた。高度経済成長になると、車は外から買う。ガソリンも買う。いろんなものを外から買うので、地域からお金が出て行きました。子どもたちも都会に出て、教育費も同様に、地域からお金が出て行きました。

名古屋大学に高野先生という人がいます。学生さんが、豊根村（愛知県三河山間部）でエネルギーの調査をしました。どれくらいエネルギーにお金をつかっているか、を調査しました。5億円使っている調査結果でした。1500人の村で、ガソリン代だとか、電気代だとか、灯油代だとかで合わせてそれぐらいになるということです。豊根村には森もあるし、川もあります。そういった地域の資源を活用すれば、5億円の産業になる可能性があるということです。石徹白においても電気代は100世帯で2000万円くらいになります。それを地域で作ることができれば、地域から出て行くお金を減らすことができる。地域が持続可能

になればグローバルで持続可能になると考えました。いろんな地域で小さな水力発電をやりませんか、と仲間たちと働きかけたところ、石徹白（いとしろ）という地域に出会いました。

私も素人で、当時（2007年～2008年）、東京で仕事をしていて、この集落に通いながら助成金の申請をして、ベトナム製の水車を買いました。NPO地域再生機構の駒宮理事長という発明家のような方から、ベトナムの水車が安く買える、設置したらすぐ電気が使えると教わりました。地元の水路を調べて、落差がある場所に2つ設置しました。ただ、許可をとることを知らず、あとで市役所に叱られました。地元の人は、水路は全部自分たちの物だと思っています。冬に設置したので、落ち葉が流れて、すぐ詰まる。電気制御することを知らなかったので、水の勢いがいいと電球が割れたりしました。お粗末な状態で、最初は人が見に来たときだけ動かすというところから始まりました。

何を思ったか、私はこれに未来を感じて、東京の会社をやめました。2008年です。このままではいけないと岐阜の実家から、石徹白に通いながら、地元の人たちと一緒に実用的なものをつくろうとしました。



最初は、全国の水力の専門家に話を聞きに行きました。2009年に農業用水に50センチの落差を使って、1秒間に200リットル、ドラム缶一本くらいの水量で家一軒ぐらいの電気を作る

「せんすい車」を作りました。もう一つは隣の農産物加工場に上掛け水車。昔ながらの直径3メートルの水車です。小さな物から順番にやりました。地域にNPOがあり熱心にやってくれましたが、多くの人たちからは「一部の人がやっている」

との声が聞こえてきました。「よそ者が農業用水で遊んでいる」と言われました。

地域の人たちは、エネルギーや環境問題にはあまり関心がなく、なんのためにやっているのか、だんだんわからなくなって、「これじゃやっていてもしょうがない」と思うようになりました。地域の人の関心があることをやるのがより重要だと思いました。若い人と話をしていたら、20代、稲作農家、高校時代パソコンクラブだということで、100世帯の集落のホームページを作りました。たかがホームページですが、地域の若者5人で（若者と言っても40代ですが）、ホームページを作りました。しばらくして、地域の女性、外から石徹白に嫁に来た人。若いお嫁さんは子育てで忙しいけれど、カフェをやりたいという話が出ました。その人たちと地元の農産物を使ってコーヒーを飲む場をつくりました。地域のカフェでは最初は時給も出ませんでしたが、4月から12月くらいやっています。

水車は作ったが、農産物加工場で作るものがありませんでした。休眠していた施設でした。なにを特産品にするかから始まって、活動して6年くらい経ちます。とうもろこしが8月に穫れます。夏、8月に来ていただくと、甘くておいしいとうもろこし食べられます。それをつかった加工品を考えました。農家では冬場仕事がないので、ドライフルーツをやっています。干し芋だとか、みかんです。小さなところから始めて試行錯誤してやっています。

全部の活動を「みんなで楽しくできることからやろう」ということを重視しています。いきなり儲かることをやろうとするとできない。すぐには儲からない。水車もカフェも。みんなでやるのが大事で、集まること自体が楽しい、ということがあります。田舎だと夜に女の人が出ていくのは難しいですが、カフェの寄り合いというと出て来れるので、いろんなおしゃべりをします。水力発電をやったので、メディアに取り上げられました。全国から見学に来られるのですが、お昼を食べるところがなく、カフェで予約制のランチを出します。今度は、水力の電気で作った特産品も買っていただけます。それぞれ別の活動ですが、だんだんつながっていくのです。なにもやらなかったら

始まらなかった。まずやってみることで、そうすると、お客さんが来てうれしい。だんだん、もうちょっとやらなきゃ、ということになり、お金を出さなきゃ、リスクを負わないといけない、となります。だんだん小さな階段を上がっていくような形で活動が発展してきました。



そういうことをやっていると移住の人も増えました。この7年間で12世帯28人が増えました。100世帯の集落で1割の方が外から入って来ました。なぜ増えたのかよくわかりませんが、いろいろやっていたら面白そうな地域だと来てくれたと思います。もともと仕事がない地域です。人口は減ってきています。増えたり減ったりして、毎年10人くらい減ります。毎年お年寄りが亡くなるので減ります。これを止めるのは大変です。

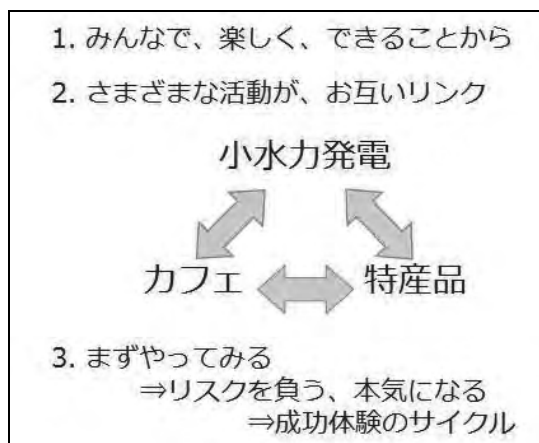


2008年～2015年の7年間の、子育て世代の移住により、12世帯28人が増加。

人口増減は今、横ばい状態です。仕事がない地域で、移住のコンセプトは「わたしは子育て、あなたはチャレンジ」です。

子育て環境が素晴らしいところです。田舎で小学校6人しかいなくてかわいそうだと最初は感じましたが、小学生がひとり一人が主役です。大人と触れる機会が多く、6年生になるとその集団のリーダーにならないといけません。チャレンジと

というのは、仕事を作らないといけません。なんか仕事ないですか、という人は難しいです。自主、自立でないといけません。そういう人たちが入ってきています。農業だと、自然栽培に取り組む人が来られます。弥富の出身の方がフルーツほうずきを作っています。私の嫁さんが「石徹白洋品店」を営み、地元の野良着を復刻したり、草木染めをしたりして活動しています。



変わってきた中である人が言われたのが、「地域づくりは今に始まったことではない。自分たちの手で暮らしを作る、村を作るのはかつては当たり前のことだった」でした。50年前、馬を使って田畑を耕した時代です。田んぼ、「結」の作業、みんなで順番に作業をやっていました。おばあさんは「みんなで協働作業、大変だったが、すごく楽しかった」とおっしゃいます。

山奥の集落で縄文時代から地域が続いていました。みんなで地域を維持してきました。土建屋を作ったり、スキー場を作ったり。山奥だから、自分たちで自分たちの暮らしを作ることをずっとやってきました。だんだん便利な世の中、都会、会社勤めがいいとなりますが、よく考えると昔は自分たちで地域のことをやっていました。それをやらなくなると地域は衰退します。そうではなくて、自分たちで自分たちの地域づくりをやっていくことを今の時代も続けたいといけない、とその方は言われました。

いろいろ調べると大正13年に水力発電を作り、集落175人で出資して昭和30年まで地域に電気を供給していました。農業用水も明治時代に3キロ、山の中を引いてきました。その水路で発電をしようと、2014年に100世帯みんなで出資して新しく農業協同組合を作りました。億単位

の投資ですが、地域の人たち、みんな借金してリスクを負ってでもやろうということになりました。

発電所は2つ作り、1つ去年、行政が作ったのが稼働しました。今年6月みんなが出資した発電所が稼働します。水力発電は、エネルギーのためということだけでなく、地域を自分たちで作る活動、昔の人たちがやってきたように今の時代に自分たちでなにができるか、ということで地域の人が取り組んできました。



最後にまとめです。

田舎でエネルギーの活動をしていて、エネルギーをどうしたらいいですかと聞かれます。実際に取り組んで、太陽光とか、再生可能エネルギーが増えるといいと思いますが、そんなに簡単に解決していきません。どちらかと言うと、「思い」の部分が大事だと感じます。自然の恩恵に支えられて自分たちの生活があります。東京にいと自然から切り離された生活をし、自分の力で全部できると思っていました、農産物や土があって、水があって、エネルギーがあって、生きていける。

「自分の命がどこへつながるか」ということがすごく大事だと思います。エネルギーの問題が起きた時に、誰かのせいにするのではなく、自分たちでやってみる。例えば食料問題です。国が悪いと言うのではなく、自分たちがやるのが大事だと思います。

大きなシステムと小さなシステムが併存と言われますが、地域のシステムがあって、グローバルな大きなシステムに問題があった時にも、揺らがないような地域・暮らしであるべきと思っています。日本は成長を越えたと思いますが、そうした成長が終えても、未来に持続する社会を作っていないといけないと思います。

(文責：渡辺 勝弘)

医療機関を拠点とした 地域コミュニティ

上田 章弘

JA 愛知厚生連 足助病院 企画室長



足助病院の企画室長の上田と申します。よろしくお願いします。基本的に病院なので、病院の視点の発表となります。当院は、早川院長が主体となっていていろんな取り組みをしています。また、病院を定年退職した60歳以上の方が主体となっている事例を、病院を代表して報告します。

足助病院の位置は豊田市の中心部から約20キロの足助地区の中心部になります。バスで行くと1回の乗り換えをして1時間かかるところです。旧足助町、旭町、稲武町、下山村があり、そこが豊田市と合併して広大になりました。主な診療圏は、長野県の根羽村、愛知県設楽町からもかなりの患者さんがみえます。当院の診療圏は、足助地区、稲武地区、旭地区です。豊田市の人口は42万あまりですが、当院の診療圏は13,622人です。高齢化が急速に進み、高齢化率は40%になっています。

豊田の中心には愛知県厚生連豊田厚生病院606床、トヨタ記念病院513床の2つの大きな病院があります。足助病院は、2013年6月27日に豊田市、農協などから補助金を受けて、建て替えをしています。これが病院の外観です。



新足助病院 外観 ①

豊田市北東部の田舎に
2013年6月27日竣工

足助地区は、重要伝統的建造物群保存地区に指定されており、外観の色が条例で定められていま

す。「なんで、病院がこんな色なのだ」と、今でもクレームがきます。条例で定められていますので、「申し訳ありません。条例で指定されています。」と答えています。

病院の理念は1997年からこのように決めています。「安全・安心・満足の医療・福祉（介護）・保健活動を通じ、中山間部地域住民の生活を守り、自然と共生できる文化的地域づくりに貢献する」この視点で活動をしています。病院の概要ですが、190床、一般100床、地域包括ケア40床、療養50床となっています。常勤医師は13名ですが、足助病院には医師が大学からほとんど派遣されていません。10年前から問題になっている医療崩壊の典型的な病院です。当院も10年前から医師が派遣されておらず、医師を自前で探しています。経営的にも、毎年2億、3億の赤字の経営が続いています。私の仕事はそれを黒字にすることです。地域包括ケア病棟などを導入して収入を増やし、費用の大幅削減もすすめて、赤字削減で今年度、もしかしたら黒字になるかもという状況になっています。

当院は、外来一日314名、入院166名となっています。足助病院は、いろんな取り組みをしてきました。訪問看護の制度が始まる前から訪問看護をしています。また、電子カルテ、在宅療養におけるIT活用、今はWEB型の電子カルテを活用して連携した医療活動を行っています。在宅医療は訪問看護の制度が出来る前からやってきました。およそ20年前から在宅医療をすすめていました。在宅医療は、ICTを使っただけでは難しい、なかなかうまくいかず、失敗していました。早川院長が中心となって、在宅医療をやっていましたが、高齢過疎化地域においてはなかなかま

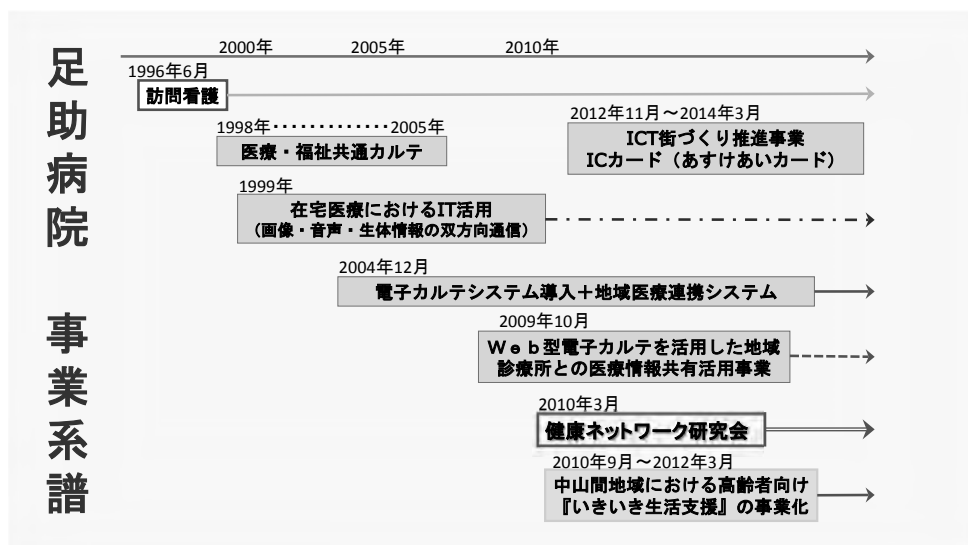
くいかず、I T Cを使つての医療はなかなか難しいということでした。電子カルテは平成15年12月導入しました。当院は愛知県でもかなり早く導入しました。そのデータを、当院と同じ地区の近隣7クリニックの医師が見られるようにしています。社協や登録

された訪問看護師さんが閲覧できるように仕組みを整えています。勝手に見られては困るという意見もありましたが、院長の方針ですすすめています。

当院では、「あすけあいカード」を住民の方に配っています。平成24年総務省のICTスマート端末推進事業で2カ年受託をうけて、医療分野と交通の融合によるICスマート端末の実現の実証実験を受託しました。この「あすけあいカード」ですが、メディカには、足助病院の診療情報が入っています。アイマールには、地域バスの決済機能が入っています。電子マネー決済は当院の売店での決済支払い機能が入っています。エコポイントをやりたかったのですが、お金が掛かるということで出来ませんでした。



メディカシステムと言うのは、救急搬送されるときに患者さんがカードを持っていて、豊田市の全28台の救急車が全部で読み込めるようになっています。救急隊がこれをかざして、患者さんがどういう病歴か、どういう薬を飲んでいるか、把握して搬送先に通報します。時には、救急隊は患



者さんの財布からカードを出して読み込む、そういうことを実際はやってもらっています。その中には、既往歴が入っています。患者さんをお願いして、必ず重要なものなので財布などに入れてもらうようにしています。これが「あすけあいカード」で、地域のバスの決済をこのように行ったり、中身を救急隊が見て利用します。現在は3千枚弱くらい配っています。豊田厚生病院で当院のカルテを救急車搬送中に見られるように、迅速な対応を行えるようになっています。高齢過疎化が急速に進んでいる地域なので、救急車で搬送されるケースが多くなっており、そういう仕組みをとっています。

我が国は、今後過疎化、高齢化がすすみ、医療費、介護費用が大幅に増加します。そうした中で、当院は、0歳から74歳の方は入院ではほとんどみえません。そういう方は急性期医療をしますが、当院は75歳以上が85%を占めますので、「まあまあ」型の医療を行っていると、院長が自分言っています。そこで、「地域包括ケア病棟」の概念が昨年の点数改正で出来まして、急性期医療ではない、回復期の医療を行うということで、そういう病棟として平成27年4月に開設され、赤字が縮小しています。当院の地区では若者の働き手が少なく、介護職がなかなか確保できず、フィリピンのミンダナオ国際大学から研修生を受け入れてEPA事業として迎え入れています。

「三河山間地域安心して暮らせる健康ネットワーク研究会」の活動ですが、平成22年度経済産業省が公募した医療介護の周辺サービス産業の調

査事業を受託して行っています。その中で医療機関を主体とした複合サービス事業を行っています。この事業で一万人規模のアンケートを行いました。地域における問題点としては、高齢者の老老夫婦が地域では50%になっていました。男性では85歳以上の方の50%の方が自家用車の運転をしていました。日常生活で困っているのは、病院が受診できない、ということを期待していましたが、一番がイノシシ獣害ということでありました。そういった調査を行って、こういったことをしようかと考えていました。

その中で、平成23年11月、総務省の事業で、送迎のサービスと配食サービスを行っています。



通院については、足助地区は片道500円、旭地区は750円、配食サービスは夕食のみ500円を設定して補助金でこういった活動を地域で行いました。これは補助金が終わった時点で、実際自分たちのお金で運営となりましたが、かなり高額の設定になり、うまくいっておらず、配食サービスは他の業者へ委託して、送迎サービスは違う形で行っていますが、その活動はうまくいっていません。そういう活動は、難しいということがわかりました。

新しい病院になったので、地域住民参加型の活動を行っています。出前でいろんな地域に行っています。ロコモ予防体操倶楽部（下）は毎回40人くらいが参加しています。脳いきいきクラブ（右上）は、いろんな手作業をして行う催しで月2回やっています。足助村塾も2ヶ月に1回行っています。院



長サロンもやっています。地域のコミュニティの場として、開かれた空間をつくらうということで、玄関ホールを開放しています。

玄関前にはコミュニティバスの発着場があります。多くの地域バスが足助病院を基点に各地区をぐるぐるまわっています。どこにバスが走っているのかも電光掲示板で表示しています。病院が新しくなった時に院長が地域住民にパティオ畑を開放したいということで、地域の人に花も植えてもらっています。収穫で余った野菜を持ってきていただく広場をつくり、「贈与の広場」という取り組みを行っています。JAあいち豊田から余った野菜がどかっと来ると一瞬のうちになくなります。そういった、開かれた病院ということで取り組みを行っています。

総合視点としては住民が主体で、病院は地域のコミュニティの場ということを大切にしています。文化の発信地という視点でそういう取り組みをすすめていました。そうすることで、昨年、愛知県の人にやさしい街づくりの受賞をしました。

いろんな失敗もしましたが、昨年度から、名古屋大学と豊田市、東京大学と共同でいろいろやっています。名古屋センター・オブ・イノベーションと呼んでいる事業です。文部科学省の160億円の補助事業をやることになりました。中山間地域における、モビリティ活用型モデルコミュニティ構築のために、足助地域でいろんな事をやろうということになりました。交通系と医療系を融合させて。名古屋大学の調査ですが、高齢者の移動手段は83.5%が自動車です。民間のバスが撤退し、行政の「あいまーる」と言うバスが週1回各地区を運行していますが、一便当たりの平均利用人数は5.7人、同平均収入は1,000円。収益は営

業経費の15%未満です。地域バスはほとんど利益がでていません。どうしていこうかと一緒に考えています。名古屋大学のアンケート調査を通じて、5～10年後には困った状況になるということが分かってきました。東京大学が小型電気自動車のコムスを改良して活用方法を考えています。



当地区はガソリンスタンドが少ない。入れに行くのに往復40キロかかる方もみえます。コムスは家庭の電気では30キロしか動きませんが、電気切れになると困るので、充電センターを作ろうとしています。

そうした中で、あすけあいカードの中に、共助のマイカーを提供してもらったら、提供して頂いた方にポイントをつけます。「共助マイカー」といって隣の人を乗せてきたらポイントをつけます。名古屋大学や豊田市と一緒に交通系をつかってお出かけ促進を考えています。

もうひとつ、足助病院プロジェクトでやっているのが、健康まちづくりネットワークという見守りサポートです。昨年できました。

その背景として孤独死があり、見守り活動で人感センサーを使って見守りシステムをつくろうと考えました。人感センサーを通して、名古屋の息子さんからも様子がわかるようになります。動いていないということが探知してわかります。地域に根ざした見守りシステムを構築していこうとしています。病院としては、日中運動しなさいよと指導しますが家に戻るとあまり活動してないことがわかったり、夜中トイレに何回も行ったら頻尿だということがわかってきたりします。例えばそのような生活指導を診察でやろうとしています。人感センサーのボタンを押すとセンターや見守り隊に通報してかけつけるといったシステムをつくろうとしています。

足助病院プロジェクトの目指す姿は、住み慣れ

た場所でその人らしく、最後まで暮らす、「高齢者は介護の対象ではなく、生活する主体」という理念として、①住まいの継続性、②自己決定の尊重、③自己資源の活用を三原則とし、中山間地域でも地域居住の実現を目指しています。

そのために、高齢者の見守りサービスや、お出かけ促進策を併せて実施することで、地域に暮らす高齢者のQOL（生活の質）向上を目指します。

次に、マイカー相乗り支援、乗合タクシーやコミュニティバスの効率化、需要に合った小型モビリティの活用など、地域のニーズに合った共助型の移動支援によって交通格差を解消し、地域居住を可能にする持続可能なコミュニティを目指しています。小型モビリティはガソリンスタンドが近くにはないため、家庭で充電ができます。

豊田市役所・経営戦略室からの情報発信として今年1月28日の中日新聞で、高齢者外出支援や足助

のタブレットを活用した実験の様子が報じられました。

足助

病院としては、10年後に目指す姿として、「老人社会だが安心して暮らせる」地域の形を目標にしています。



足助病院が10年後に目指す地域の形

老人社会だが安心して暮らせる

- ◆自然と共生
- ◆元気な老人が虚弱な老人を支える
- ◆食と運動が健康を作る
- ◆贈与の精神
- ◆エネルギーと食の自給
- ◆過疎の維持
- ◆地域貨幣
- ◆ICTがらくらく利用できる
- ◆住民共通カルテ

ご清聴ありがとうございました。

《尾張地域の事例報告》

ささえあいたすけあい 地域だんらんまちづくり

～星崎ブロックの地域包括ケアシステム

中村 八重子

南医療生活協同組合 副理事長



南医療生協には、12の地域ブロックあります。星崎ブロックは、中学校区が地域エリアとなっています。その星崎ブロックから小さなまちづくり、地域包括ケアが進みつつある報告をさせていただきます。

定款での活動地域は愛知県です。本部は緑区にあり、県内の組合員比率が1.04%になっています（愛知県人口742万人に対して）。私たちの基本理念は「みんなちがってみんないい ひとりひとりのいのち輝くまちづくり」。組合員総数が今7万8千人。千人を超える職員。事業収入が103億です。経営剰余が5億を超えています。

支部はくらしの単位で86支部あります。機関誌の手配りは、3483ルートあります。配布率は情報ネットワークの単位で88.3%、積み立て増資は生協を支える単位で4,117人です。

活動班は「地域だんらんの単位」で1106班。班で「困った」が出れば解決します。班会の開催は、3人寄れば班会です。班会したり、イベント開催したり、訪問行動したりして、いろんなところでお話す対話数は年度末には12万件以上の対話が積み重ねられます。

年に1回総代会があります。ひとりひとりの組合員に方針が届きます。組合員からこうしたほうがいい、という意見が届くように、組織内を下から上、上から下へ回っています。理事会には専門・特別委員会があり、月に1回各委員会があります。それぞれの委員会で論議がされています。

星崎ブロックの話をさせていただきます。

2000年に介護保険が導入され、その中で地域から、「うちのおかあさんが痴呆で困る(当時)」

と、声が出ました。星崎では「なかまの家」を立ち上げました。地域がよく見えてきました。これが南医療生協の介護事業の始まりであったと思います。1支部1福祉運動で、「いっぷく運動」と言います。61支部に95カ所の「たまり場」があります。お茶会には職員も参加しながら、月1回、2回のところも、毎週のところもあります。こういった「たまり場づくり」が広がってきました。



「食卓会」
名南ブロック柴田支部のいっぷく「柴田食卓会」。毎回、支部運営委員さんたちが食事をつくり、皆食。職員もお客さんで参加します

名南ブロック柴田支部のいっぷく「柴田食卓会」。毎回、支部運営委員さんたちが食事をつくり、会食。職員もお客さんで参加します。

2003年百人会議がスタート。自分たちのほしいものは、自分たちで考え運営する「介護福祉事業推進会議」は、常に100人以上の方が定例で集まり、それがかたちになって、2004年「グループホームなも」を星崎地域で開設しました。「まちにとけこみ、まちとふれあう」が合い言葉です。介護甲子園やCBCラジオでみなさんもご存知かもしれませんが、今ではゆとりが来ています。

最近15年ほどの市民の協同づくり

2004年「グループホームなも」



「まちにとけこみ、まちとふれあ
う」を合言葉に完成した「なも」。
「介護甲子園」やCBCラジオ
でもおなじみ。看取りも

それがかたちになった「グループホームなも」です。見つけ出した空き家を改修して「まちにとけこむ」介護施設になりました。ボランティアでも活躍しています。2011年度・2012年度、「介護甲子園大会」優秀賞を2年連続して受賞。つボイノリオさんも激賞

さかのぼると2003年に、ヘルパーステーションが必要になり、立ち上がりました。この開設運動は、まちを見直すいい機会になり、これがグループホームをつくるきっかけになりました。

星崎には高齢者が増えてくる、行き場所はどこか、ケアマネージャに話を聞いた、見守りもない、認知症の高齢者の家族をもつ人が困る…。グループホームの必要が出てきました。この地域にも行き場もない、高齢者がいるよね、グループホームが必要だよと。まだそのころは宅老所という呼び名でした。まず、私たちは現状を知って、グループホームってなんだろうと、学習や見学会を行いました。見学に行きましたところ、ホテルみたいでした。自動ドアでシャンデリアがあって、でも、そこの利用者さんの顔が暗かったのです。それと反対に、古民家を借りて経営しているところは、利用者の顔がとても明るく、わが家のように迎えてくれました。利用料もこちらの古民家の方が安かったです。私たちが自分たちで作るのは、身の丈に合ったものが良い、空き家ならあるはず、と空き家探しが始まりました。

学区の地図を広げて、ここが空いていると話をしたのを覚えています。準備委員会をつくって、自転車のチャリンコ隊で、空き家探しが始まりました。私たちの思いは、グループホームが理解されるようにしないといけない、地域で徘徊があるに違いない、地域の人にグループホームを知ってもらいたいということでした。生活協同組合なので、みなさんに出資していただけるような思いも、片方でそろばんをはじき、片方でロマンと、そんな風に回りました。

空き家を探しました



やっと空き家が見つかり、地域に「ご迷惑をおかけします。よろしくお願いします。」と、あいさつに回りました。グループホームができあがって、見学をみなさんにご連絡しました。見学だけならすぐ終わります。私たちの地域を知ってもらうための見学会に取り組みました。みんながガイドをし、大勢の方がいらっしゃいました。450名の方々に、開設前一ヶ月に来ていただきました。

開設式



開設式です。全て手作りです。地域の方がいっぱい来られました。120人以上の方が集まり、出資金も集まりました。入所も始まりました。「きちんと守っていこうね」と、会議も行いました。毎日5～6名が見学されました。地域の話と、出資をお願いして共感をしていただきました。グループホームのボランティアが立ち上がりました。実はボランティアさんですが、誰が利用者か、ボランティアの方か、わかりません。ボランティアとして大切にしたいことをみんなで考えました。

「なも」というのは名古屋弁で「そうだなも」「よういらしたなも」と語尾につく言葉なんです

ね。上品にする言葉です。高齢者の言葉を最後まで受け止めようと決めたと覚えています。

最近15年ほどの市民の協同づくり

2007年「小規模多機能ホームもうやいこ」



「グループホームなも」に続き、「小規模多機能ホームもうやいこ」開設も、地元組合員が、出資金も、職員・ボランティアも、日用品も、利用者さんも集めた、身の丈に合った事業所づくり、事業運営です

「なも」の暮らしを紹介します。朝早く起きて、お掃除を自分たちでされます。お祭りにも出掛けます。若い親子の訪問もあります。私たちの地域には小学校区が4つあり、隣の学区で、「私たちの地域にもグループホームがほしい。」という声がありました。ところが名古屋ではその時にはグループホームはできづらくなっていて、小規模多機能ホーム「もうやいこ」を開設しました。地元組合員が、空家探しから出資金、ボランティア、日用品も集め、職員確保もしました。身の丈に合った、「なも」と「もうやいこ」が作られました。

2つの開設運動から組合員中心の事業所づくりが始まりました。自分たちでつくった方が早い。

「もうやいこ」では職員が足らずに職員も集めました。ヘルパーをお訪ねして、月に一度、週に一度助けてと言って、手伝っていただいた方もあります。そしてボランティアも集め、会が発足しました。そんな動きで地域の方から、高齢者問題の共感が広がっていきました。

私たちの診療所が老朽化して、こんな診療所がほしいよね、と3年間取り組み、2008年には「老健あんき」を開設しました。1階は診療所、2階は組合員ルーム、3階が職員室、屋上にはボール。時計台の診療所をつくれるといいねと毎回模造紙に夢を描き、星崎診療所の新築移転とセットで開設されました。やっと3年目に土地ができ、2、3階を小規模老人保健施設で申請して許可があり、1階は診療所、2、3階は老人保健施設で「老健あんき」になりました。私たちの運動は「要

求・追求」でなく、自分たちで作る「要求・実現」の大きな協同の輪に広がりました。

今、南医療生協には64の事業所と86支部のネットワークがあります。地域との協同の営みによって、急性期総合病院が313床、回復期リハビリ病院60床、7医科診療所、3歯科診療所、5訪問看護、7訪問介護をはじめ、医療・介護・福祉・くらし助け合い事業など64事業所を運営する、くらしのネットワークをつくっています。

住み慣れた自宅で療養するなら足りないサービスは何か、みんなで話す機会があります。「自宅で療養するために必要な訪問看護も必要だね。星崎でつくろうよ。」と全部の支部で訪問看護を知る班会を行いました。ボランティアも立ち上げることができました。これが「ほしぎきボランティアの会」です。2013年1月7日からです。

ほしぎきボランティアの会

小さなことからボランティアと一緒に始めましょう

発足式:2013年1月7日(月)

登録34名で発足しました。

(登録目標30名)

現在は46名の会員で活動しています。

～会員募集中～

入会金100円

年会費100円



立ち上がり経過は、在宅での看取りが出来る地域づくりを進めるために往診や介護だけでなくその隙間を埋められるのではないかと、ボランティアが参加することによって患者や家族を孤立させない在宅療養になりそう、地域で活動するボランティアはなかった、だったら作りましようとなり、この会が発足しました。4月には訪問看護ステーション星崎も発足しました。そんな訪問看護事業が誕生することによって、いろんな「困った」が出てきました。

「おたがいさまシート」です(次頁)。

困った情報がたくさん来ました。12年～15年で417件です。ヘルパーさんの仕事で出来ないことを埋められるのではないかと、いち早くボランティアが動きました。

厚どよいおせっかいで結ぶくらしの協同

おたがいさまシート

南医療生活協同組合

どなたがどのような事に困っていて、どんな手助けを希望しているのかを具体的に記入しましょう
 ご本人またはキーパーソンの了承をいただき地域ささえあいセンターへFAX(052-625-0653)またはコピーを提出します
 下記②と③の部分が個人情報に当たりますので、取り扱いに注意しましょう。対応が終了したら廃棄しましょう。
 依頼される方は太線で枠内①～④、地域ささえあいセンターは⑤～⑧、対応される方は⑨～⑩

①今回の使用目的		☐ お願ひ事の依頼		☐ 経過報告		☐ 結果報告	
②困っている方は		氏名		フリガナ		性別	
南医療生活協同組合員本人・家族・未加入		住所		TEL		性別	
③依頼される方		氏名		関係など		性別	
住所		TEL		性別		性別	
④困っていること							

「おたがいさまシート」は、2012年度からはじまった「ささえあいシート」から進化した、「おたがいさま運動」の便利グッズ。ご近所・班・支部・病院・診療所・介護事業所をネットワークで結ぶ、言葉「お助けメッセージ」です。2015年度から活動開始です

2015年にスーパー閉店で「困った」の声が出てきました。なんとかならないか。お豆腐屋さんが移動販売であり、知り合いの八百屋さんにも来てもらうことになり、2月から市場が始まりました。学区の会長さんを訪問して役員連名で回覧を回していただけることになりました。南区の行政からもチラシを入れていただいています。火曜日の午前中と毎月第2日曜日に市場があります。第2日曜日は、診療所が閉まっています。この「楽市楽座」は地域にはなくてはならない場になっています。また診療所の中の喫茶店は、その日はたまり場でボランティアが活躍して、話し相手、野菜、お花づくり、外出の手伝いをします。



空き家探しも、リフォームも、出資金も、できるところは自分たちでやっちゃう



ゴミ屋敷が見つり、一緒に訪問。老夫婦が、ゴミが出せなかったのです。ケアマネに相談にのってもらいました。環境局の収集車を呼んで叱られました。「こういう形で呼ばないでください」と。「決められた場所に出して下さい。」と言うことでした。

反省点がありました。植木鉢のような中にボウフラがわいていた。でも、そこにメダカも飼

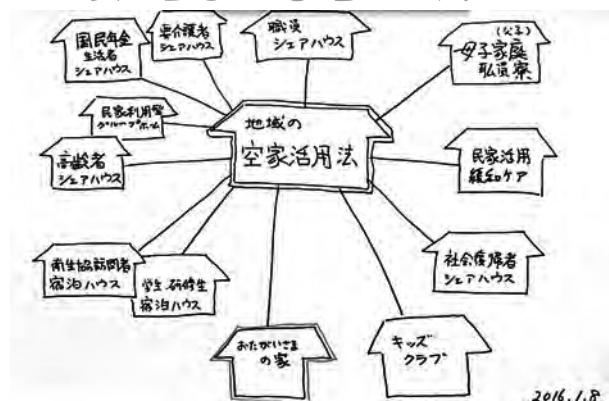
っていました。それも片づけてしまいました。あつてはいけない反省点でした。

南医療生協には、26のボランティアがあります。南医療生協では、市民、事業所、職員、組合員のおたがいさまのケアシステム（おたがいさま運動）ができつつあります。生活支援としてのおたがいさま運動、介護予防としての健康づくり運動がまちづくり運動として広がっていくことが、地域包括ケアシステムの具体化だと思っています。厚生労働省からモデル事例に選定されました。2014年3月、50の事例に載りました。

このスケッチが、あたらしいまちづくりの私たちがめざすイメージです。

空き家がいっぱいあります。それを利用してのまちづくりです。地域の人たちが常に集まれる、困ったを言える、そんな場所づくりが出来たらいいなと、出来ることを自分たちでやります。

あたらしいまちづくりイメージ



まとめです。生活協同組合は「くらしの協同組織」です。市民自治に基づき、おたがいさまの取り組みをひろげることにこだわれば医療、介護・福祉などの事業も「くらしの視点」で営むことが出来ます。「くらしの協同」に基づく地域ネットワークは南医療生協のまちづくりそのものであり、「地域の人々が主体的に参画する地域包括ケア」です。星崎版よって横丁のチラシも見て、見学に来ていただきたいと思います。

《三重地域の事例報告》

地域資源を活かした まちづくり

高橋 幸照

水土里（みどり）ネット 立梅（たちばい）用水事務局長



「立梅用水」という農業用水を管理しています、水土里ネットの高橋です。

多気町勢和地域ですが、三重県のへそです。なにが有名かというと、「高校生レストラン」です。その「高校生レストラン」のまちである多気町の旧勢和村というところです。平成18年に合併。7割山林、3割平地で、まったくの中山間地域です。

地域資源を活用したまちづくり



- 総土地面積53.58平方km・人口4,956人 ●7割山林、3割平地(中山間地域)
 - 農地面積700ha・総世帯数1,701戸・農家戸数1030戸・2種兼業農家率96%
 - 平均耕作面積40a・主な農産物・米・お茶・白菜・キャベツ・白ネギ・麦・大豆
 - 一級河川櫛田川(香肌峡県立公園)
- 農業・農村(水・土・里)を取り巻く地域の課題
- 人口の減少 ●高齢化の進展(平均就農年齢65.3歳) ●後継者不足
 - 遊休農地の増加(現15ha) ●獣害 ●生産意欲の低下

1

櫛田川の水を取水したのが農業用水「立梅用水」です。約200年前に作られた用水です。地域の課題としては高齢化の進展、人口減少です。平成18年に5500人の人口が、ちょうど今年合併して10年ですが、500人減りました。統計では今から15年先の2030年には、3700人に間違いなく減ります。四半世紀で32%の人口減少です。こうなると行きますと地域はいろんな問題を抱えます。もちろん行政もいろいろ定住策を考えています。出生率をあげるとか施策をやっているのですが、私たちの地域の住民として、何ができるのだろうかというところで取り組みをしているところです。

遊休農地が増えて来ています。それから獣害です。少し前、タマネギ泥棒が多発しました。200平米のタマネギ畑が一晩でタマネギがなくなりました。頭の黒い人間がとっていったのではなく、なんとサルの大集団がやってきて、全部抱えて山の中で涙を流して食べていました。目に染みるのですよ。だけどおいしい、そういうところです。もちろん獣害柵というのを50キロ、10集落それぞれを囲んでいます。こうなれば完全にサルの惑星で、獣害に悩まされて農家の生産意欲も低下しています。

一昨年、私どもの立梅用水が国内の農業用水では初めて、国の登録記念物、そして世界灌漑施設遺産に登録されました。



2

どういったことが評価されたか。農業用水は米を作るための水を運ぶ道具なのですが、私どもの農業用水は200年前から多面的な機能として活用し暮らしに役立てています。それが上図①～⑨までの機能で、防災用水、さあ火事だといった時の火災に対応する用心水など、そして大雨が降ってくるとこの用水は山と平地の間を流れているので全部山の水をキャッチして集落の方に流さない

取水機能もあります。地域活性化のために祭りをやったり、ウォーキングをやったり観光にも役立ちます。また地域教育で、伝統ある農業用水を子どもたちにしっかり伝えます。福祉用水としての生活維持機能もあり、小水力発電で100年前から中部電力と協同して発電もやっております。農村環境保全とか生態系とか歴史的遺産などの機能があります。そして農村協同力というような機能で、これは目に見えない、そういう歴史ある用水路をきちんと維持していく、みんなの力が農村協同力を生んでいる、ということです。

ところが、今から25年くらい前、江戸時代の水路をコンクリート水路にしました。そして圃場整備事業として田んぼを真四角にする、農業の基盤整備事業がたくさん行われました。兼業農家の若者のヒアリングさせていただく機会がありました。その時、兼業農家の若者は、「私は立梅用水がどう流れてきているのか知らない」「農業維持するために、コンクリート水路は泥上げとか草刈りなどの協同作業が楽になり、便利になる」という考え方でした。私どもの組織として議論してどうもおかしい、まるで水道の蛇口のようにになっている、水が出て当たり前。私たちの先人は苦勞して用水を作りあげてきました。明治・大正・昭和時代が変遷した中で、もっと農地、農業用水を大切にしていって気持ちを育まないといけない。どうしたらいいかと、動きをはじめました。

そのひとつが「あじさいいっぱい運動」です。



あじさいの花咲く立梅用水…東海美の里百選

はじめは用水の啓発活動をやってきたのですが、それだけではなかなか継続的な活動につながっていかない。そういった中で「あじさいいっぱい運

動」と称して、用水や田んぼの周りにあじさいを植える活動を始めました。この活動が農業用水を大切にする活動につながるかは、全然わかりませんでした。とにかくみんなでやってみようと、平成5年から始めました。立梅用水は全線28キロあります。こうしたところに、あじさいを全線に植えようと始めたのですが、なんと15年かけて植えることが出来ました。途中、土地改良区の職員がそういう活動するのを、「賦課金、田んぼから徴収するお金で、職員は農業用水管理する仕事をしていただいいんだ、そんなボランティア活動は余分な仕事だ」というようなことを言われたり、「こういうところにあじさいを植えたら草刈りの邪魔になる」とか言われたり、厳しい話もあったりしました。

20年経ってこんなふうには、剪定もして、肥やりもして、あじさいいっぱい農業用水に変わって来ました。そうすると、地域の人たちが、自分たちがつくりあげた空間を誇りに思えるようになりました。外部からの評価もいただきました。そして、今まで見向きもしなかったようなところに人がやってくるようになりました。これが、地域が大きく変わるといったコミュニティの効果です。この用水にゴミの投棄も昔はたくさんありましたが、それもなくなりました。



あじさいまつり…立梅用水ボートくだり

農業用水や田んぼを活用して、「あじさいまつり」をやろうと始めて、今年で20回目です。なんと1万人も外部から来ていただける大きなまつりです。用水をボートで下る「ボートくだり」は、ものすごい人気です。6月12日に今年も開催されます。県外からもたくさんお見えになって、

なんと3時間待ちです。どんなテーマパークよりもおもしろいと評判です。このボートに乗って下って行くと、江戸時代の素掘りのトンネルがあります。その中を下るのが非常にアドベンチャーな気持ちになります。天井にはコウモリ、ヘビもへばりついていました。それが非常に楽しいです。伊勢自動車道の勢和多紀インターを降りてすぐです。ぜひお越しください。

遊休農地を活用した大豆づくり・・・コミュニティスクール



休耕地を活用してビオトープをつくって、生態系の保全もしています。子どもたちの教育が本当に大事です。小学校4年生ですと10歳。15年後には25歳です。その子どもたちが、大人になり家族を持ち、子どもが生まれる時、なにを考えるかが大切です。地域から主体的に教育の中に入れていただいて、年間64時間単位いただいて小学校のコミュニティスクールをやっています。

ジャンボ紙芝居で立梅用水の歴史を伝える勉強会をしたり、休耕地を活用して大豆を作り、味噌やおからや豆腐も作って、勢和定食を作ります。そこまでやって「食と農」の取り組みです。

そういったことで、地域が自分たちの主体的なところで資源を保全する活動の協議会を作っています。20団

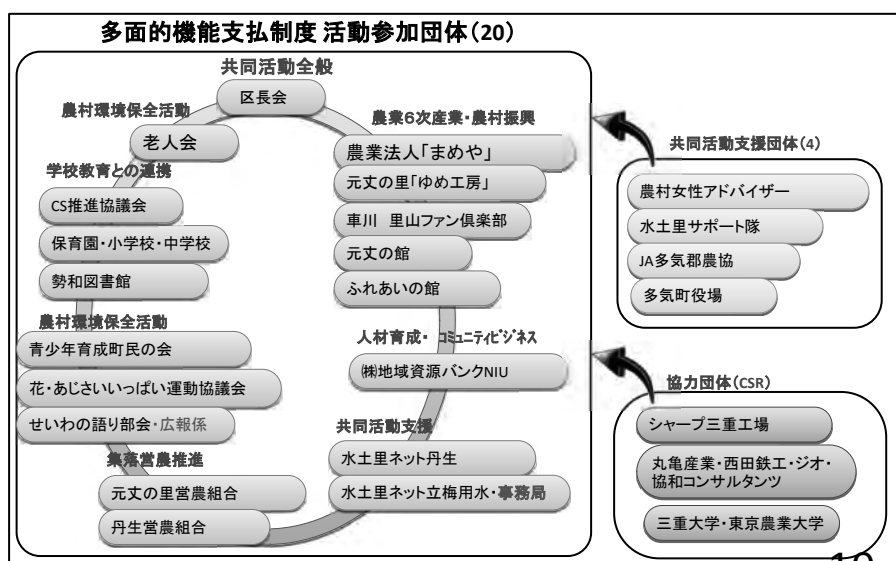
体、4支援組織、7協力団体での多気町勢和地域資源保全・活用協議会を平成19年から立ち上げました。水や土などの環境を保全します。国の多面的機能支払い交付金制度に則ってやっています。(下図参照)

その中で、特に、小水力発電をしています。

100年前から800kWの発電で、中部電力と一緒に、用水の多面的活用的一端として発電しています。この発電所も単に櫛田川の水をとって発電するだけでなく、用水は全線28キロございますが、灌漑期間は120日間、4月15日から8月25日です。その間に降雨があると、櫛田川からの水と合わせて、満水になってオーバーします。そうすると発電の方に回して発電出力を上げます。灌漑期間外はもちろん800kW出ますが、灌漑期間でも降雨の利用と、農業の水が要るときと要らないときがあり、櫛田川の水がオーバーする時、それから夜間は農家も寝ていますので出力をあげています。この発電所はずっと100年動いています。

今取り組んでいるのは「彦電1号」、地産地消型の発電です。地域農業を活性化させたいと取り組んでいます。今までの感覚ですと、電気は買って生活、というのが定着していますので、地産地消を自分らでやるとなると、その活用する主体が、一生懸命に主体的に取り組まないと本物にな

多気町勢和地域 資源保全・活用協議会 (多様な主体20団体・4支援団体・7協力団体とその役割分担)



ってきません。その中で何かを見いだしていくということで、我々は循環型の社会を形成したいと取り組んでします。平成24年から実証実験をやってきましたが、その時に、こんな地域になったらいいという地産地消マップをつくりました。



6次産業施設は、保育園の廃園になった建物ですが、ここを加工所として活用しようと、この裏に用水があり、まずか50センチの落差で、出力はわずか1kWですが、そこに蓄電池を据えて、6次産業施設を動かします。そこで米粉を挽いています。地域の農産物を乾燥して、その米粉とブレンドして「機能性米粉」として商品化しようと営農組合が取り組んでいます。それから獣害柵です。サルは柵をしても効果ない。やはり電柵のバッテリーに活用します。足湯の施設があってその温熱に使います。あとEV車を、ここを発着点にして稼働できないかと3月から運用開始されます。

西村彦左衛門生家と立梅用水事務所



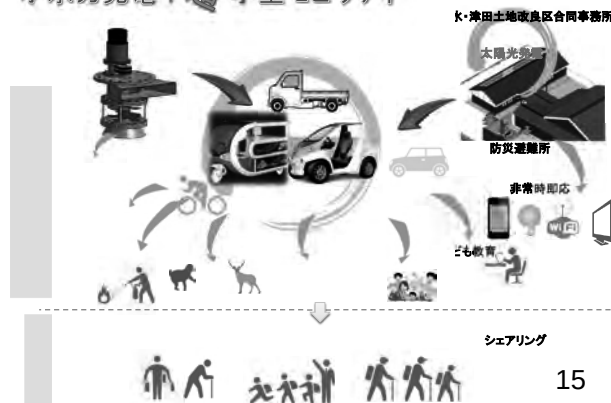
私どもの事務所は西村彦左衛門 - 用水を作り上げた200年前の功労者 - の生家が空き家になっていて、ここを活用しなければということで、事

務所にしております。生家は造り酒屋で井戸があります。井戸水はきれいで、10t貯留されています。こういう環境で交流の場として活用しようとしています。事務所は太陽光で、11kWほど動いています。

上流に「彦電」の小水力発電があり、事務所は28キロ下流にあり太陽光発電をしています。この2つの電源基地地点の移動でわたくしどものビジョンに対してトヨタ車体が協力していただくことになり、超小型モビリティ2台を無償で貸してくれます。この間を走らせます。獣害対策車、地域防災として活用します。そして事務所は、登録遺産の管理、都市と農村の交流、子どもの教育で活用します。避難所としても活用します。井戸水があり、太陽光があります。それで一次避難所として活用します。

くらしをサポートするということで、人口減少、独居老人などの地域の課題を、電源基地を基点に、28キロ区間でモビリティを走らせることで、都市との交流、農業の6次産業化、人口減少と高齢化対策、買い物支援、獣害対策、地域防災、都市農村交流などモビリティを活用して地域の人たちの主体性でやります。4月に「NPO法人せいわ」を立ち上げました。すでにモビリティは来っていて4月から実験的にやっていますが、いずれにしろ地域の人たちの主体性が必要です。その基は、しっかりしたコミュニティであり、地域が協力して地域を守る、そういう地域社会をめざします。資源の活用とあわせて努力してすすめていきます。

小水力発電+超小型モビリティ



未来をひらく“小さなつながり”と 協同組合の社会的役割

～座談会 第12回東海交流フォーラムを終えて～

2016年1月23日に開催され、多くの共感を生んだ第12回東海交流フォーラム。このフォーラムを受けて地域と協同の研究センターNEWS 編集委員会は4月7日（木）、名古屋都市センター会議室にて、座談会を行いました。

フォーラムの報告集に合わせて、座談会で分け合った新たな共感をみなさんにお届けします。

【参加者】向井忍（研究センター専務理事）、仲田伸輝（研究フォーラム地域福祉）、飯村初美（三重地域・研究フォーラム食と農、環境、地域福祉）、下里玉美（尾張地域・コープあいち理事）、橋本吉広（大学非常勤講師）、田所登代子（三河地域・コープあいち理事）、古田豊彦（（株）中央建設名古屋顧問）、熊崎辰広（岐阜地域・研究フォーラム地域福祉）、

※今回の座談会報告では敬称を略させていただきました。役割は座談会当時。



◆◆身近にある「小さなつながり」◆◆

仲田

健康の友の配布活動維持はフォーラムのサブタイトルにもなっている「小さなつながり」そのもの

東海交流フォーラムの南医療生協報告は全体にかかわる報告と星崎ブロックとしての活動でした。

私は4年間、運営委員として活動に関わっています。

全体にかかわる活動としては平和運動に関する取組みとして、世界大会、3.1ピキニ、5.31平和行進、秋から冬の平和コンサート、これらの取り組みの各種実行委員会、学習研究交流集会などの全体活動をしなが、ブロック独自の活動もすすめました。

その中で組合員活動は全体活動と地域活動と二つあることを実感しました。私が運営委員になった時、支部は実態はほとんどなく、健康の友の仕分け配布や支部運営委員会は単独でできず隣の支部に単独で参加していました。南医療生協の地域活動の柱をどこに置くべきかという視点で組合員活動の見直しに着手しました。



支部活動の機軸をどこに置くのか。「健康の友（南医療生協機関誌）」配布活動をベースにした地域での組合員活動の組み立て直しを課題としました。毎月・年間活動と健康の友配布を維持するのは大変でした。配れない、やめる、新しい組合員が増えた時にどの（配布）ルートに乗せるかなどの調整も毎月々々必要でした。

南医療生協は組合員活動として素晴らしいことをすすめています。その不可能を可能にしている条件は健康の友にあるという認識を組合員世話人の中で共有することが大事と考えたわけです。

運営委員は10人、70代の高齢者もいて実際に活動できるのは6人くらいです。健康の友配布のほとんどは70歳代。大切な配布係り・世話人の世代交代をどう図るかが課題でした。

組合員はコープあいちでも44万人と組織は大きくなっています。南医療生協でも同様で、組織の中では多種多様な活動がありますが、小さな協同の場として「健康の友」配布が大事だと考えています。

これが、星崎ブロック10支部あるうちのひとつの支部の状況です。健康の友の配布対象は540人でちょうどいい規模です。

健康の友の配布活動維持はフォーラムのサブタ

イトルにもなっている「小さなつながり」そのものともいえます。

熊崎 配布スタイルは？配布スタイルによって活動費が支部に与えられる仕組みはありますか。

仲田 活動費は班の数に応じて運営費として支給されます。（配布）規模に対する予算の違いはありません。配布世帯数にすると 470 世帯です。

向井 大きな組織の協同を「小さな協同のつながり」が支えているということですね。

飯村

立梅用水の歴史と人々のつながり、推進力

私は東海交流フォーラムをふりかえって、立梅用水の歴史をひも解いてみたところ、歴史が元禄時代まで遡っていて、驚き



ました。丹生村地士・西村彦左衛門さんが私財を投げ打って庄屋・長谷川周平さんと立梅用水開設を発起したのは1808年1月。その当時、川をせき止めて水路を作るなんて。地域では、彦左衛門さんのことを「変わり者と思われていたのでは？」と思います。この時代に水路を作ろうと考え、その気持ちが、やがて周りのみんなに伝わり、水路が形になり、200年を超える今でも引き継がれているのは素晴らしいとあらためて感じました。

今では田植えを初め、小学校の授業の一環として、子どもたちが地元の大豆を使った味噌作りもされています。このような経験から子どもたちもきっと自分たちの地域を意識して育っていくことでしょう。住民みんなで自分たちの地域を守っていかうという姿がありありと見えるような気がします。あじさいまつりでは中学生の「ボート下りが出来たら、もっと楽しいかも！」の声に耳を傾け、危なくない様にするには？どの様にすれば安全性を保てるかなど子どもたちと一緒に話し合い実現するなど、若い世代の意見から新たな取り組

みが大きな広がりになり、県内各地から集客、ボート下りは、なんと待ち時間が1時間以上という人気イベントに！！地域全体を巻き込んだ取り組みに広がり、つながっている点が素晴らしいと思います。

生家を片付けた折に昔のお雛様が出てきたようで、代々受け継がれているお雛様を集めた雛祭りを開催。3組ほど雛壇が並びました。こちらの地域では売電ではなく、地域みんなで使う。余剰な電気を充電して有効利用するために電気自動車を2台借用することに決まっていたましたが、厳しい予算の中、さらに2台購入することにされたようで、3月いっぱい電気自動車も4台走っていました。予算もいるがみんなのためになり、地元の人々の気持ちを動かすことにつながっています。メダカ池は整備されイベント開催など、みんなが集える場が変わり、『まめや』もリニューアルされ、豆料理を看板メニューにして、地元のお母さんたちが腕を振るっています。つくしの季節になると、子どもたちがつくしを摘み取ってきておじいさんおばあさんがはかまをとり、それをまめやさんが買い取ってくれ、子どもたちのお小遣いになっているそうです！食材のほとんどが地元産。農家の方たちの生産物も販売されています。あじさいを植樹する時、最初は冷たい目だったが、花が咲いて、人が集い、ゴミのポイ捨てがなくなる等、プラスアルファの効果が見えるようになってきています。幼い子どもから高齢者まで、気持ちをひとつにして、勢和のまちを大切にされている事が伝わってきます。

この地域は松阪市に近く、コープみえのエリア会などでは彦左衛門さんの生家を借りて会議やイベントなどを企画しようと話し合いが始まっています。第6次産業施設『元丈の里』には石窯があり、美味しいピザを焼くことが出来ます。米粉も販売されていて炊飯器でパンケーキが出来る製品も開発されました。その施設を1万円くらいで他団体に貸出して焼きたてのピザなどを味わってもらう事も立案されています。電気自動車がどういふものか見に行きたいとの声も聞こえてきます。獣害が多い地域であり、それに対応するための定期巡回にも大いに役立っています。

過日、高橋さんと電車で一緒になり、これから

新幹線で小水力発電事業の代表者に会いに行くとのことでした。蓄電池開発の会社とのつながり役になれば良いな、とおっしゃっていました。勢和という小さなまちから他県に出向き、さらに大きく広がりを進めています。エネルギーで実行力・行動力ある人がまとめている点が推進力になっています。

初めに描いた夢がひとつずつ実現している、素晴らしい地域です。一消費者として米粉を買いに出掛け、まめやで食事し、地元の野菜を購入して支援してきたいと考えています。自分たちで作った電気を自分たちで使うだけでなく、蓄電して電気自動車を導入するなど将来を見据えた発想と行動でこれから益々楽しい地域です。

向井 地域の歴史を大切にする住民のまちづくりに、コープみえのエリア会の商品活動や体験がかみ合って進もうとしていることも紹介されました。地域やくらしの公益的な課題は一つの組織だけで解決できることは少ないですが、協同組合に関わるにも内部合意が必要で時間もかかります。それを動かしていくために協同組合がどのようなポジションをとれるかなど、たくさんのヒントがありそうですね。

◆◆小さなつながりを支える中間支援組織とアソシエーション・コミュニティの関係◆◆

下里

世の中の隙間を埋めるNPO・協同組合

私は東海交流フォーラムに参加して、荒井先生のお言葉をお借りすると、グローバリゼーションの中で進行してきた地域産業の空洞化や



過疎化に対して、小さなつながりや新しい協同の取り組みで未来を拓く可能性を感じました。

地域の資源を活用して、小さな循環型経済が生まれている事例を知りました。豊橋は「ひと」、石徹白と多気町は「用水路」、足助は「病院とあすけ

あいカード」、南医療生協では「空き家」がその資源だったように思います。それぞれの地域・まちには、核となる人がいて、協力する人がいました。小さなつながりから少しずつ大きな公共につながるものがフォーラムで実感できました。

フォーラムを終えて、自分の住んでいる地域ではどんな資源があるかと考えてみました。お祭りや伝承する「もの・こと」があると親から子、その子、また横のつながりもできます。例えば、お祭りでは衣装の着方、これってどうなのと訊くことで、隣人とのつながりもできます。地域で守っていききたいものを大切に伝えていきたいと思いました。

これからは、元気な高齢者が大勢いるので社会参画で新しい協同ができないか、と考えています。医療・介護にお世話になるのは2割と聞きます。健康寿命は男性71才、女性が74才とまだまだやれることは沢山ありそうです。元気な高齢者の地域デビューを促進していければと思います。もちろん、若い人のパワーも必要です。

また、子どもの教育も考えたい課題です。用水路の報告では子どもの関わりも見えました。子どもの教育に地域が関わるといい。近頃は、近所の子に注意することに「ためらい」を感じたり、子どもたちを巻き込んだ凄惨な事件も報じられています。このような時代になった背景にはITの発達や、ゲーム・携帯の普及による人と人のつながりやコミュニケーションの希薄さが根底にあるように思えて仕方ありません。

以前のフォーラムで、小木曾先生が「自分を開く」とおっしゃっていましたが、自分を開くには勇気が必要です。なかなか開けません。この地域を見ると転入出が多く、元々から住んでいる地元の人が少なくなっています。それらを要因として、つながりの希薄さがひろがっているように思います。アメリカは大陸系で移民など分け隔てなく保証があるとのこと。日本は島国で他所者が受け入れられない風土がありそうです。どうやってつなげていくか、どのように小さな協同を広げていくかが見え難くなっています。

つながるには半永久的にその土地に存在するもの、地域資源を大切にしていく。行政の力も必要ですが、しかし、行政の役割がなかなか充実して

いないと思います。そこで「メゾ領域」にある、生活協同組合やNPO、国と住民をつなげる仕組みが、その隙間を埋られるのではないのでしょうか。今後、生活協同組合も大きな役割がありそうです。

向井 生協やNPOが地域の資源を大切にしつつ人と人との隙間をどうつなげられるか。転入出によるつながりの希薄化、SNSやゲームの広がりなど様々な問題があるなかで、協同組合に人をつなぐことが期待されるとして、どう接近したらいいか、何があればいいか、組織としてのあり方に話をすすめてみたいと思います。

橋本

「縁でつながるコミュニティ」と「志でつながる結社（アソシエーション）」を考えてみましょう

「小さなつながり」と言う場合、そのサイズはどれくらいなのでしょう。コープあいちだとブロックとか行政区エリアとかでしょうか？ 医療生協なら支部？ さらに小さな組織では班もありそうです。つながりの範囲や組織の小ささ加減も念頭に置き、つながりと地域との関係を整理しておくことが必要に思われます。



まず、この点を考えるためのひとつのフレームとして「縁でつながる共同体（コミュニティ）」と「志でつながる結社（アソシエーション）」という構図で考えてみます。縁に基礎を置く共同体は地縁・血縁などで、同じ地域に住んでいるとか、血のつながりといった事実に基づいた共同（体）です。ただし、同じ地域に住んでいるとか、血がつながっているからと言って、自動的に“つながり”が出来るかといえば、恐らくそうは言えないでしょう。地縁や血縁といった枠組みの上に、人と人との具体的な関わり合いなどがあって、はじめて生きたコミュニティとして機能するのでしょうか。

次に共同体（コミュニティ）と結社（アソシエーション）の関係についても考えてみましょう。

縁でつながる組織＝コミュニティと、この指とまれの意志にもとづく組織＝アソシエーションの違いがフォーラムの5つの報告事例でも入り組みながら語られました。

目的をもって集まったのに（結社）、一緒に行動しているうちに、その目的とは無関係に関係者の間につながりが出来てくるというのは、よくあることです。地域生協の共同購入の班でも、集まってみるとお互いの家庭事情や困りごとともわかり、利用とは関係ないコミュニティが生まれてきます。消費生協は“この指とまれ”のアソシエーションですが、常にその根元にコープ・コミュニティが育っていく可能性をはらんでいたと言えます。

これに対し、同じ協同組合でも農協・漁協は先ず農村・漁村があり共同体が息づいていた。そこに産業組合があとから組織されました。このように先に地域共同体があった農協・漁協に比べると生協の方は、地域のうえにあとから作った組織＝アソシエーションと言えます。そう考えた時、生協の中に生まれるコープ・コミュニティと地域コミュニティとは、どこでどのように接点が生れるか、あるいは生まれないかが問題になります。

他方、地域にせよ、生協内にせよ、コミュニティが成立するには、ただ一緒にいるだけではなく何かが必要だと先ほど申し上げました。

そこで、まずコミュニティが成立する範囲と「小さな協同」のサイズについて着目してみましょう。サッカーチームでは、試合中にピッチに出ている11人の選手には会話がなくてもお互いの意思が繋がっていると言われます。これは訓練で培われた関係でしょう。では50人のサッカーチームは成立するのでしょうか。“あうん”の呼吸で分かり合えるのはせいぜい10～20人という説もあり、100人・200人の集団ではなかなかコミュニケーションは成立しない。すると、そこには生きたコミュニティは生まれ辛い。まず、このコミュニケーションが成立する範囲がコミュニティの成立要件になるのではないのでしょうか。「小さな協同」という場合も、生協でいえば班がコミュニケーションの成立する基礎的な範囲と言えるのでしょうか。隣の班のことはあまりよくわからないはずで

「小さな協同」と地域という視点から見ると、

南医療生協では、班一支部一ブロッカー全体という組織の重層構造があり、それぞれの層に対応した医療生協の医療・介護・ささえあい事業が存在します。つまり組合員組織の大きさに対応して各事業があります。「小さな協同と地域の未来」という場合も、地域の広がりにもとづく階層性に対応しながら、生協の活動が地域とどのような形と広がり、どうつながっていくかが大切と思われれます。

元々、農協・漁協の役員も地域代表的な性格と重なってきた面があり、これに対して生協が地域コミュニティに関わろうとすると、生協というアソシエーションが地域コミュニティと直結するというより、まずコープ・コミュニティが生協と地域（コミュニティ）の中間（メゾ領域）に立って両者を媒介し、地域にもともとあった関係性や地域文化性を生協とつないでいくことになるのではないのでしょうか。これから地域包括ケアシステムを担う生活協同組合になっていこうとする時、地域の人々の助け合いとか支え合いとかという点を踏まえて作らないと、生協の助け合いは地域と離れたところであって、生活協同組合単独のシステムに留まってしまい、地域との接点は出てこないと見ていいでしょう。地域との接点は歴史的にあったものを生かしながら、そこで弱まった部分を補い、アソシエーションとコミュニケーションが結束する形で人々が主体となり広げるという関係論が南医療生協の実践からは見えてくるように思えます。

この点が、小さな協同から地域の未来につなげる過程の基本にある点でしょう。すでに見たように生活協同組合というアソシエーションのすそ野には、コープ・コミュニティが形成されていくと考えられます。生協の事業組織とは違った人間関係がそこには生まれているはずですが（けれども、これは生協内のコミュニティであって、地域コミュニティと同じではないことにも留意が必要です）。

医療生協の支部は小学校区にひとつとか、複数あり、コミュニケーションも成立する組織と言えます。この支部を束ねるのがブロックであり、ブロックを束ねるのが理事会という関係ですが、この“束ねる”構造が下部一上部の縦構造になってしまうと、上部組織はコミュニティから離れアソ

シエーションの性格を強くし、地域コミュニティとの関係は弱くなっていくと考えられます。したがって、結論から先に言いますと、まず支部くらいの範囲のコープ・コミュニティと地域コミュニティが重なり合う関係にすることが大切です。班も重要なコミュニティですが、班は範囲が狭く限界があります。支部くらいのサイズが階層構造の中位にあって横につながり、班が持っている狭さを面で超えることが重要でしょう。

そして生活圏で支え合いを推進しようとする時、班とか、支部とかが横につながったコープ・コミュニティが、地域コミュニティと交叉しながら、「小さな協同」によって地域をエンパワーし、またエンパワーされながら、地域の未来へとつながっていく方向を、政策的にも実践的にも推進していくことが大事だと思います。

コープぎふのおたがいさま東部は多治見から中津川に及ぶ組織で、地域住民の生協への加入率が高いと言う事情もあって、生協の組織ではあるがアソシエーションとしての生協であるよりも、地域コミュニティに近い組織になっており、地域で支え合い、地域をどう作っていくかを目的意識的に追求しています。そういう組織がコープ・コミュニティのなかに生まれ育っている。したがって、それぞれの地域性の違いがあっても一様には言えませんが、医療生協だからできるということではなく、消費生協においても、地域生活協同組合という志向性をしっかり堅持すれば組合員組織のコープ・コミュニティが生かされ、地域と生協を繋げる役割を果たせるという点に確信をもち実践することが、「小さな協同が拓く地域と未来」というテーマに接近することになるのではないのでしょうか。

司会 足助 病

院・星崎ブロッ
ック・ちよい
ボラの会と
その地域の
広がりにも
橋本さんが



指摘された課題が現れています。下里さんがおっしゃったメゾ領域における協同組合の可能性と重ねると、行政区域での移動や買い物と医療という社会的課題を担う厚生連の

病院、運営ブロックが地域コミュニティの重要な医療生協、全ての中学校区に足場をおくちよいボラの会、いずれも地域の課題を補うものです。それらがかみあって、小さな協同が広がるという指摘でした。

◆◆そこで育まれる規範や文化、自然…◆◆

向井 先日、コープあいちくらし・たすけあいの会の運営委員会に参加したのですが、会員が約2,000人で、活動時間は年間約36,000時間、1回約2時間とみても年間に18,000もの「おたがいさま」の場面があるのです。そのコーディネーターは愛知県52市町村に39人です。コーディネーターが会員をつなげるのですが、地域たすけあいの会をめざしています。南医療生協のおたがいさまの報告を聴いて、たすけあいの力をコミュニティとどうつなげるかの着目が大事だと思います。私たちの組織はアソシエーションですが、コミュニティにどう広がっていけるかについて、大きくなった地域生協でも考えたいテーマです。

そこで、田所さんの経験から人が地域でささえあう際に大切なことはなにか、お話しいただきます。

田所

しきたりとルール、変わることに変えないこと

息子を訪ねてアメリカに行ったときに、いろいろな人が住んでいる「シティ」で、ルールの大切さを実感しました。



現実的には会話ができないと「地域」では暮らしてはいけません。だから、他国から来た人たちのために、言葉が話せるように英語学校がありました。年齢関係なしに、無料で教えてもらえます。州によって違うかもしれませんが、私の行ったところは福祉事務所のよう施設があり、そこにいけば誰でもその人に必要な援助が受けられました。子ども連れで参加す

る場合は、親子別々に年齢にあった英語教育が受けられます。それも、どの国の人も平等です。近隣の国出身者は、会話は出来ても読み書きができない。職場では書類があり、それが理解できない。日本人は文法などの学習をするので、会話は不得意だが読み書きは出来る。地域で生活するためには、両方必要でそれを、英語学校で習える。南米の日系二世の人々が20年ほど前、大勢で日本に来た時、彼らに大人も子どももきちんとした日本語教育を受けられる場があったかと考えると、全くなかったのではと思います。しかし、アメリカは移民の国なので語学教育をしないと地域で暮らしていけないことがわかっているのでもしかりできている。このような点が素晴らしいと感じました。

だから、決められたルールはしっかり守っているようでした。たとえば、登下校の時間帯に、学校周辺を減速して走行することです。どこの地域でも、中学も高校も同様にみんな守っていました。日本のように単一民族で暮らし、言わなくてもわかっている常識ではなく、多民族が集まり暮らす国なので明確なルールが示されていないと成り立たないことを誰もが理解しているようでした。この前、日本では中高年が田舎暮らしに憧れて地方に行く例が報道されていました。空き家を借りて、以前からその地域で暮らす人々と親しくしていたが、ある日追い出されてしまったというものでした。その地域のコミュニティにきちんと入らないといけないようです。そのコミュニティの規制や「私の言っていること」を守らないといけないという指摘でした。そのことを本当に理解できなくて都会に戻ったそうです。その地域ではルール作りがきちんとしていなかったのではないのでしょうか。わかりやすい基本的なルールをみんながわかるようにした方が暮らしやすいのではないかと感じました。

このような事例が小さな協同につながるかは分かりませんが、地域のルールが余所から来た人にも分かるようにするべきだし、継続したしきたりを守るだけではなく少しずつ変わっていくことが大事ではないかと思います。

設楽町の和太鼓集団「志多ら」の事例は地域の中で仲立ちする方たちがいて、地域の祭りを継承し、変革しながら伝統を守り、余所者を涵養する

度量があると思います。余所者が入り込んでも文化を継承しています。暮らしの中で少しずつ変わっていく事がないといけないのではないかと考えています。

また、介護現場や製造業のように、外国の方に助けてもらわないとやっていけなくなる状況を見据えるなら、ちゃんとしたルールをみんなに分かるようにしていくべきではないかと思っています。

向井 文化やコミュニケーションが違う人たちが協同できるルールや保障をコミュニティ自身が持っているというお話でした。社会全体の成長が減速し、地域コミュニティでのお互いの見守りが必要になってきますが、日本社会も変化しなければならず、それをどう作っていくのが問われます。文化の問題と関連しますが、古田さんはどうお考えでしょうか。

古田

源流から海へ、脈々とつながり、広がる協同

伊勢・三河湾にそそぐ河川の流域圏は愛知・岐阜・三重の東海3県とほぼ重なります。東海・伊勢・三河湾流域の自然生態圏域（バイオリージョン）の森と川と海の資源を生かし自然と共生する持続可能な協同社会、食・衣・住と教育、医療、福祉の基本的な暮らしの自給圏をつくる事はできないでしょうか。

東海3県の総面積は約2万平方キロメートル、人口は約1千万人です。全国平均では3平方キロメートルに一人が住んでいることになりますが、この地域では2平方キロメートルに一人ということになります。源流から海へ上流から下流へ枝わかれし、入れ子構造になっている流域圏で、はたして1千万人の人口を支える協同の自給圏をつくる事は出来るでしょうか。

流れのプロポーションという言葉があります。流域の中で人が生きていける範囲を逸脱するとプロポーション（つりあい・均整）が失われ、景観の美しさ（人間と自然とが関わりながら育んでいるのが景観）、その景観が失われてしまいます。それはやがて大げさに言えば人類の滅亡につながるということになります。

東海交流フォーラムで報告された地域はどこか

の流域圏に属していて、その流域圏にそこに住む人を支える資源があるわけです。資源は森であり、水、農地、家であり、歴史・文化、そして人です（人を資源とみなすことには少し抵抗があります）。そのような視点でどのような可能性があるか考えてみたいと思います。

12回開催してきた東海交流フォーラムの報告を流域圏地図に落とし込んでみます。すると抽象的ではありますが構造的に見えてくるものがあるのではないかと考えています。

地図を南北逆さにすると、源流からの営みが見えてきます。現在では過疎地といわれている地域がむしろ主役となり小さな協同が下流の大きな地域に広がっているとも考えられそうです。



それぞれの流域は入れ子構造で大きな流れから小さな支流に広がります。その流域それぞれを東海圏の中心から同心円で結ぶとどうなるでしょうか。例えば隣の流域同士は本流の川が違うので区分された流域です。しかし、その境は山の稜線です。山の稜線には古代、中世から近世にかけて、道が通じていました。横のつながり、流域同士のつながりを考えてみるのもひとつのヒントになりそうです。

恵那地域に足を運び始めて感じていることがあります。若い世代が自分たちの暮らしを変えようとしています。夫婦で、あるところに行き、そこで民宿を開いたり、ちょっとしたレストランを開くという事例を目にします。協同組合ではつながらないような人達がそこにはいます。そのような人たちは協同のつながりがなければ続かないかもしれません。そのような動きが先ほどの周辺や流域の末端の部分、一番小さな部分で動き始めているのではないのでしょうか。そのような人たちが続けられるようにするためには生活協同組合、アソシエーションはどのようにつながっていき、その人たちを援助するというか、持続可能にしていくことが生活協同組合の未来のために大事ではないかと考えるわけです。

生活協同組合の組合員では触れないことにアンテナを張っている、そんな人たちと一緒に行動することが求められているように考えています。

向井 地理的な視野でも若い人たちの新しい営みがみられること、それを支えることから社会の変化が始まるのでは、という指摘でした。生活協同組合がそれをどう援助できるか。まずは、アンテナを張り、関わり参加できる場があり、知りあう・わかりあうことからです。その小さなつながりの場がコミュニティであり、冒頭仲田さんが言われたように、生協の機関紙を人のかかわりで届けることから始まります。協同組合の内部はどうあればいいか、組織論はどうか、地域の社会的な課題、貧困問題などにどう関わるか、など小さな毛細血管の協同が大きな協同に編みあがっていく姿を考えていきたいと思います。熊崎さんの経験ではどうでしょうか。

熊崎

昔を大切にし、昔暮らし・歴史を学び馴染む

田所さんから人と人のつながりで地域の受け入れという話がありました。石徹白でも小水力発電興して地域が動きました。かなり短期間の内に水を管理する協同組合ができました。そこには外からの理論を押し付けるのではなく、その昔「結」のような形で、苦労してつくられた用水路を整備し、それを活用するところから始まりました。他所者が農村に馴染むには10年かかるとの指摘もあります。移住してきた人はそれでもがんばっています。これは和良町のことで、定年退職された元高校教師の方が妻の実家にある和良で暮らすことになり、博物館の資料整理を独力で学びながら、「昔暮らし」や歴史資料すすめることで、次第に地域と一緒にうまくやっている例もあります。

ところでダムのことですが、私は基本的にはダムは流域の暮らしと文化、生きた歴史を断絶させると考えます。最近では、徳山ダムですね。ダムができると水没してしまう平地に「徳山学舎」というある建築家によって進められたささやかな抵抗を知っています。夏休みに子どもたちを集め(かなり広範な地域から参加)、徳山の文化や歴史、自

然とのふれあいなど体験学習を10年以上進めてきました。

高度経済成長をささえてきた、大手資本による電源開発の実態なども、古田さんの言われるようにも水系で捉えることで、さらに問題点が見えてきそうです。

木材の輸入自由化が山村の基幹産業であった林業を破壊し、現状の過疎化につながっている点も押さえておきたいことです。地域に木材を使った文化があり、それを壊しました。今回のTPPによる輸入自由化の問題を先取りしているように思います。

仲田 橋本さんの問題提起に関わって、小さなつながりといった時に、サイズは相対的な概念で、絶対的なサイズはないと考えています。フォーラムで提起された小さなつながりのテーマは、それぞれが実践をつまないと近づけないように思います。

コミュニティとアソシエーションは一般論では論じられないと考えています。実践で評価しないといけません。会員の組織率で表れ方は全く違うはずです。町内会の協同組合加入率で90%と10数%では影響力が大きく違います。前者は町内の役員相談と協同組合の役員相談がほぼ同一化してすすむでしょう。10数%の組織ではそもそもそのような議論になりません。地域によってコミュニティとアソシエーションは違うと考えています。一般化してそれを議論するのは現状を見る限り課題が大きいと思います。協同組合でも地縁以外の組織率が7-8割ある状態が一般化すればいいが、そのあたりの議論の場を今後期待したいところです。

向井

今回の座談会は時間も限られ、お互いの議論はなかなかできませんでした。しかし、小さな協同をどう作るかというポイントはカバーできたと思います。

お疲れ様でした。

(文責：渡辺 勝弘)

《編集後記》

第12回東海交流フォーラムは、「小さなつながりが、自立した地域おこしにつながる」「地域のつながりづくりがこれからの社会には不可欠である」などの感想が参加者から寄せられ、「“地域の小さなつながり”に焦点を当てた画期的なフォーラムになった」との意見も出された。このフォーラムは、「協同とつながり」の大切さを知り、その可能性を感じ、今後の地域における協同組合運動を考える貴重な機会となったと思う。

私はこの3月、職員の人事異動で、事務局としてのこの冊子の編集作業なかばで後を託すことになった。人事異動で研究センター事務局活動を離れてみて、協同組合の職員の仕事について改めて感じることもある。

協同組合の職員は、組合員や地域の方といつも地域やくらしのことを話しあうことができるし、日頃の仕事を通じて、地域の「小さなつながり」にいちばん近い立場であると思う。この特集の紹介事例は、研究センターの各地域懇談会活動を通じて知り合った岐阜、愛知、三重3県の地域の方にお問い合わせしたもので、まさに協同組合の職員の周りにある事例である。この冊子を読むことで、自分の仕事場の地域や地域のくらしのことを知り、改めて自分の仕事の意味を考えることになればと思う。

そして、「小さなつながり」の可能性に光を当てて、東海における協同組合運動をどうひろげていくのかを考える機会になれば嬉しく思う。

編集委員会 事務局 鈴木隆司

編集委員

下里玉美（尾張地域・コープあいち理事）

田所登代子（三河地域・コープあいち理事）

飯村初美（三重地域・研究フォーラム食と農、環境、
地域福祉世話人）

熊崎辰広（岐阜地域・研究フォーラム地域福祉世話人）

古田豊彦（(株)中央設計名古屋顧問）

仲田伸輝（研究フォーラム地域福祉世話人）

橋本吉広（大学非常勤講師）

向井 忍（専務理事）



※研究フォーラムの地域福祉は「地域福祉を支える市民協同」の略です

【「地域と協同」の発刊について】

増刊・研究センターNEWS「地域と協同」は、地域と協同の研究センターの活動の広報だけでなく、東海地域の市民の協同と協同組合や会員の願い、要求などに関するテーマを持った、研究的な掘り下げを行う情報交換の場、そして、様々な市民や実践家、研究者の方の意見や問題提起が発信されるものを目指しています。

（2013年7月6日 理事会決定より）

2016年6月27日発行（不定期刊）

発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター

代表理事 西 川 幸 城

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39 生協生活文化会館 2F

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail: AEL03416@nifty.com HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>

頒価 300円